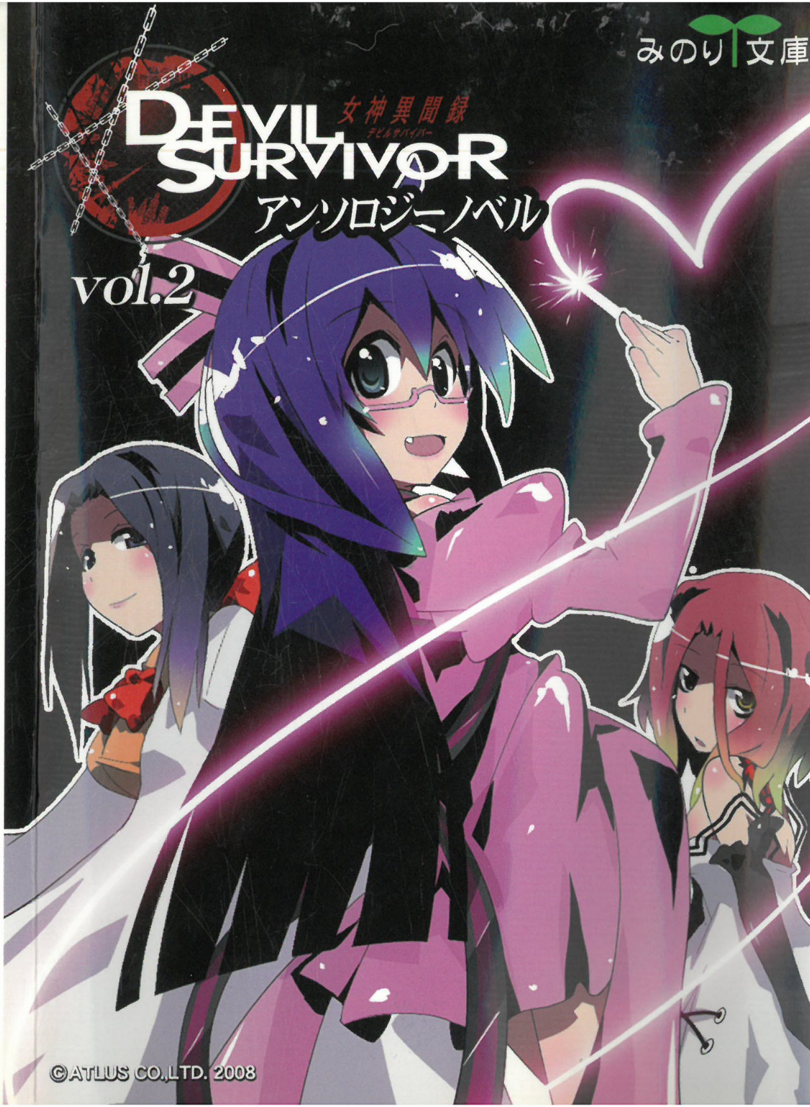
海法紀光（かいほう・のりみつ）
ゲーマー／ライター／小説家。TRPGのリプレイなども書いています。

七門（ななと）
ハマのお気楽文字書き。ゲーム中は「いあ！いあ！」言いながらアリオク使ってました。

村田治（むらた・おさむ）
（株）ランアンドガン所属のライター。ノベルの他、男性向けゲームシナリオでも活動中。

◎イラスト
異識
http://okotak.fc2web.com/
nino
http://f17.aaa.livedoor.jp/~nino/
まつざき雄嵩
http://www003.upp.so-net.ne.jp/nagaya/
やと
http://wind-t.xii.jp/

カバー：異識



みのり文庫
For GAME
X-01-02
女神異聞録
デビルサバイバー
アンソロジーノベル
Vol.2
海法紀光 七門
村田治

ハーヴェスト出版
640

みのり文庫
For GAME
X-01-02

女神異聞録
デビルサバイバー
アンソロジーノベル
Vol.2

海法紀光　七門
村田治



ハーヴェスト出版
640

ISBN978-4-434-13401-2
C0193 ¥640E

9784434134012

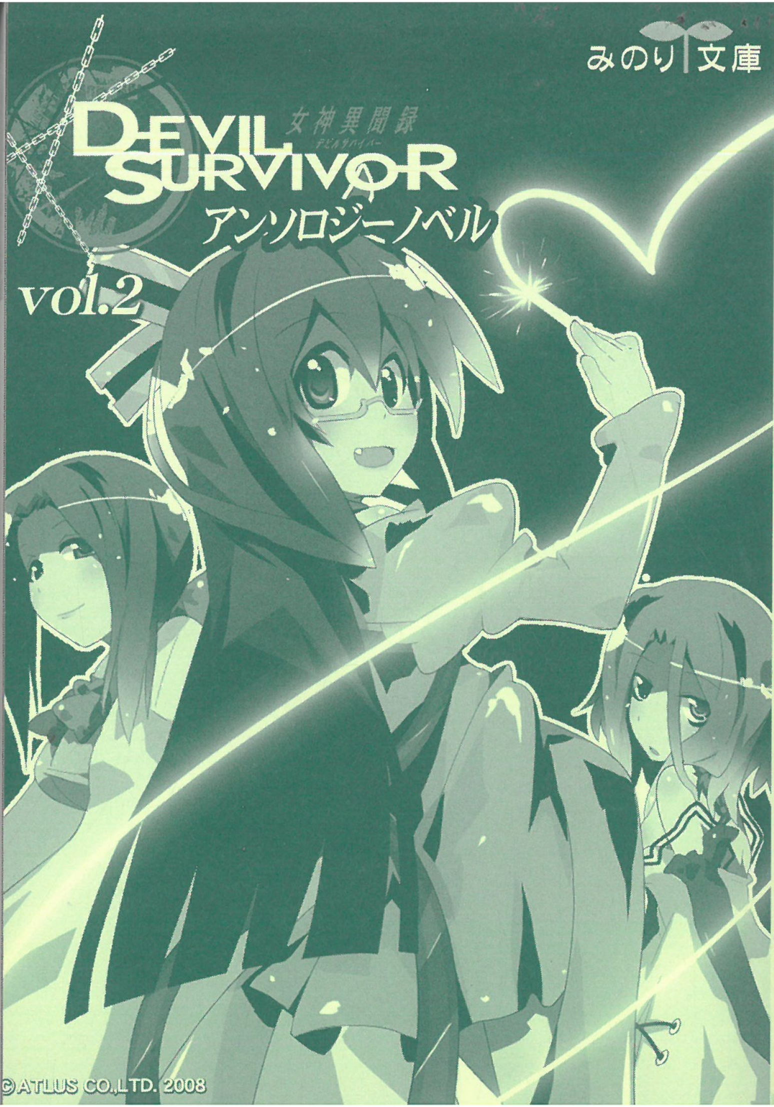
定価(本体640円+税)

1920193006407

発行/ハーヴェスト出版
発売/星雲社






みのり文庫
女神異聞録
デビルサバイバー
DEVIL SURVIVOR
アンソロジーノベル
vol.2
©ATLUS CO.,LTD. 2008

みのり
文庫



女神異聞録 DEVIL SURVIVOR（デビルサバイバー）
アンソロジーノベル

vol.2

STORY
海法紀光　七門　村田治

ILLUSTRATION
異識　nino　まつざき雄嵩　やと



女神異聞録 DEVIL SURVIVOR

デビルサバイバー

アンソロジーノベル

vol.2

STORY
海法紀光　七門　村田治

ILLUSTRATION
異識　nino　まつざき雄嵩　やと



イラスト：やと



本書は株式会社アトラス制作の
「女神異聞録デビルサバイバー」をベースにした
パロディノベルになります。
独自の解釈ならびに発想を取り入れております。
「女神異聞録デビルサバイバー」の内容に関する
公式見解ではない点ご提示致します。

キャラクター紹介



主人公
東京近郊に住むごく普通の少年。従兄のナオヤに呼び出され、渋谷を訪れる。
そこで待っていたのはナオヤではなく、山手線内封鎖という非常事態だった。



木原篤郎（アツロウ）
主人公と同級生。プログラムに精通しており、ナオヤを敬愛している。



谷川柚子（ユズ）
主人公の同級生で幼馴染み。ハルが所属するＤ－ＶＡの大ファン。



小牧翠（ミドリ）
絶大な人気を誇るネットアイドル。正義感の塊でヒーローに憧れる。



高城圭介（ケイスケ）
アツロウの中学生時代の同級生。曲がったことが嫌いで、弱い者イジメを許さない性格。



望月麻里（マリ）
「連続吸血事件」の犯人を追っている小学校の養護教諭。カイドーとは幼馴染の関係。



二階堂征志（カイドー）
カリスマ不良チーム「ダイモンズ」のリーダー。マリに対し密かな思いを抱いている。

INDEX





春沢芳野（ハル）
D－VAのボーカル。現在活動休止中の為、ソロで活動している。



神谷詠司（ジン）
表参道のバー「エイジ」のマスター。恋人の失踪に翔門会が関係していると睨み調査中。



直哉（ナオヤ）
主人公の従兄。悪魔召喚プログラムを作成した凄腕のプログラマー。



九頭竜天音（アマネ）
翔門会の巫女であり、教祖の娘。「神による人間たちへの試練を回避」するのが目的。



悪魔使いイメージ改善計画

「おお、悪魔たちが逃げていくぞ！」
「アマネ様の呼び出した女神が、悪魔どもを追い払ったんだ！　さすがはアマネ様！」
「女神を呼び出すなんて、悪魔使いとは違う！」
「翔門会の力は本物だったんだ！」
「オレは翔門会に入るぞ」
「私も！」
「アタシも！」
芝公園東京タワー下――女神ラクシュミを召喚して悪魔を撃退したアマネが、周りの人々から賞賛の声を浴びている。
　アマネと同じく、人々を悪魔たちから守ろうと駆けつけた主人公、アツロウ、ユズは、その様子を見て心中複雑だ。
「ミドリちゃんが悪魔を呼び出した時は、魔女扱いされたのにね……」
　主人公はため息をついた。ユズも主人公の言葉に、やりきれないといった様子で首を横に振る。

「アマネには翔門会の巫女っていう肩書きがあるし、それに呼び出した悪魔だって女神だもん。やっぱりイメージがいいよ」

「まったく、理不尽だよな。見た目で差別するなっての！」

アツロウは不愉快そうに吐き捨てる。

ちなみに、そんな彼が現在ＣＯＭＰで呼び出しているのは――。

蛇が巻きついた髑髏（邪鬼ロア）。

ヒョウタンからウゾウゾと顔を出している無数の蛇（邪龍トウビョウ）。

「……」

ユズはアツロウの肩に手を置いて、思い切り冷たい視線を向けた。

「その布陣で、差別するなって方が無理でしょうが……」

芝公園から出るやいなや、ユズは真剣な顔でアツロウと主人公に告げる。

「――やっぱり、悪魔使いもイメージが大事だと思うの」

ユズの言葉に、主人公とアツロウは顔を見合わせてきょとんとしていた。ふたりの鈍い反応を見て、ユズはさらに言葉を重ねて力説する。

「同じ悪魔使いでもアマネがみんなに支持されるのは、悪魔の見た目がいいからよ！

アタシたちももっとカッコいい悪魔とか、かわいい悪魔を呼び出して戦えば、周囲の視線も変わってくるはずじゃない？　そんなヒョウタン蛇とか髑髏とか岩人間とか口をぱっかーんって開けたよく分からないものとか、変な悪魔じゃなくて！」

ユズに『変な悪魔』扱いされ、主人公たちに召喚されているトウビョウ（ヒョウタン蛇）、ロア（髑髏）、ウベルリ（岩人間）、アバドン（口をぱっかーんと開けたよく分からないもの）がさめざめと涙を流す。

「そうは言ってもさ、みんな役に立つ悪魔なんだよ」

ユズの言葉に苦笑いしながら、主人公は自分のチームに入っているアバドンとウベルリにフォローを入れた。

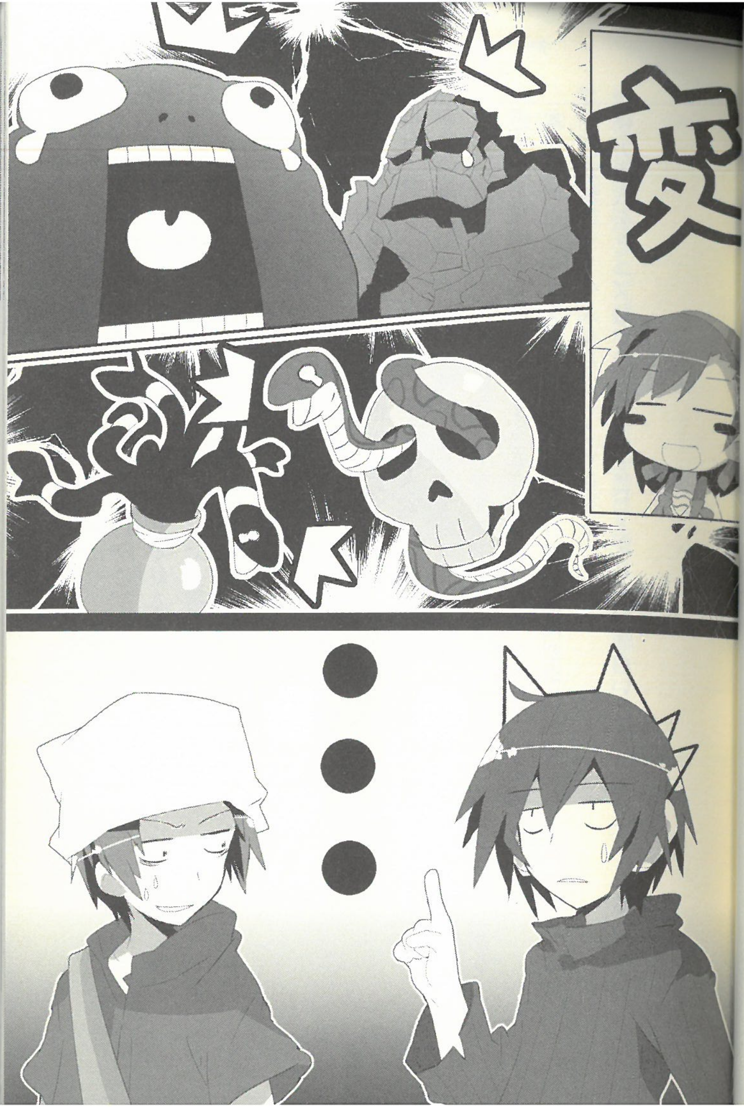
「どの辺が役に立つのよ……？」

「例えばウベルリは、『鬼神双手』のスキルで二回行動できるだろ？　この前のバトルでも役に立ったじゃないか」

「ああ、あの時……でもすぐに、バジリスクのペトラアイで石化してたけどね。岩なのに石化ってどういうことよ……主人公、石になった岩人間を引きずって戦ってたじゃない」

ユズに痛いところを突かれ、ウベルリが「ウッ」っと小さくうめき声をあげる。魔

力属性の攻撃に弱いウベルリにとって、ペトラアイは苦手な攻撃だ。
「え～っと……」
否定できず、主人公は言葉に詰まった。
しかし、めげずに仲魔の弁護を続ける。
「でも、ほら。アバドンだって役に立つんだよ。『混沌の波動』で遠くにいる敵を攻撃できるから。前に悪魔使いと戦った時も役に立っただろ？」
「ソウダ、オデハ役ニ立ッタ～～！」
アバドンも主人公に合わせて訴える。
「いや、あの時は確か、悪魔使いのとこにたどり着く前に周りの悪魔にボコられて、戦闘不能になっていたでしょ……アバドン、物理攻撃に弱いもんね……」
やはりユズにツッコまれ、アバドンは背中を向けて体を震わせる。
「オデハ泣イデナイ、泣イデナイゾ……」
……と小さな声で呟いていた。
「じゃあ、アツロウはどうなのさ？」
仲魔ふたりが心に深刻なダメージを受けて落ち込んでいる中、主人公がアツロウの連れているトウビョウとロアを指さした。



「えっと、こいつらは……」

アツロウは言葉を探して視線をさまよわせる。

トウビョウとロアは自分をフォローしてくれる言葉を待ち望むように、期待に満ちた視線を彼へと送っていた。

アツロウはふたりの期待に応えて、口を開く。

「……そうだな。こいつらは面白いんだよ、いろいろと」

「ナンダヨ、ソノ漠然トシタ評価ハ⁉」

「誉(ほ)メルトコロガナイカラ、苦シ紛レニ言ッタヨウニシカ聞コエンゾ！」

しかしアツロウはふたりの訴えを完全に無視して、話を進める。

「ほら、お前らの面白いところを主人公とソデコに見せてやれ」

「ムチャ振リ過ギル！」

「コノ悪魔メ！」

悪魔から悪魔とののしられようと、アツロウはそれもまた聞き流した。

本当の理由は『チーム編成を考え直すのが面倒だから惰性(だせい)で連れているだけ』なので、口が裂けてもそんなひどいことは言えない。

一方主人公とユズは、トウビョウとロアがどんな面白いことを見せてくれるのかと、

地面に体育座りしてばっちり鑑賞体勢に入っていた。

「「……」」

トウビョウとロアは沈黙して顔を見合わせ、やがて意を決したように頷(うなず)く。

「一発芸ヲヤリマス。――レッドスネーク、カモン！」

トウビョウがそう言うと同時に、ロアの髑髏の目から緑色の蛇がにょろりと出てきた。すかさず、トウビョウがツッコミを入れる。

「オマエ、グリーンダロ！」

「「「……っ」」」

アツロウとユズと主人公の間に、時が止まったような沈黙が流れた。

やがてユズが無言で、アツロウに使役される悪魔ふたりに近づく。そしてロアの髑髏とトウビョウのヒョウタンを掴み、ギリギリと締め上げた。

「そんなネタ、今の時代に通じるわけないでしょうが……」

「痛イ、痛イ……！」

「ツ、通ジテルジャナイデスカ、ユズサン⁉」
「やっぱり、チームの再編成が必要ね」
主人公とアツロウの悪魔たちをすべてCOMPに帰還させた後、ユズは断言した。
「でも……具体的にはどうするの、ユズ？　オレたちもアマネみたいに女神を呼び出して戦う？」
尋ねる主人公に、ユズは腕を組んで眉間にしわを寄せる。
「……それはやめた方がいいと思う。アマネの真似をしても、偽物だって余計に悪く思われるだけだよ」
「確かに、二番煎じってのはあんまりイメージがよくないからな」
アツロウもユズに頷いた。
「だからアタシは、こんなメンバーにしてみたわ」
COMPを開き、ユズが仲間を召喚する。
現れたのは、モップのように毛が長い犬のような魔獣ヘアリージャックと、沖縄の建物や高台でみられる神獣シーサー。
「テーマは、ペット系悪魔よ！　どちらも犬みたいだから人からも怖がられないし、

町中を連れて歩いても違和感ないでしょ？」
ユズの足元にすり寄る二匹の犬っぽい悪魔。彼女の言う通り、これならばペットの散歩をしている少女という姿に見えなくもない。
近くを歩いていた子供たちもユズの仲魔に駆け寄ってくる。
「わぁ～、モジャモジャ犬だ～」
「こっちの犬は顔が面白～い！」
「ばうっ！　ワシの牙で毒に犯されるがいいわ」
「喰い殺すぞ、このクスわらばーどもめ！」
「うわぁぁ～～ん、怖いよ～～～！」
せっかくのかわいい容姿も、言動で台無しだった。
逃げていく子供たちを見ながら、ゴホン、とユズは咳払いする。
「まぁ、少なくとも触ったり話しかけたりしなければ、かわいいペットでしょ。こういう悪魔なら、召喚しても周りの人から怖がられないと思うの」
ユズの提案に同意した主人公とアツロウは、デビルオークションと悪魔合体を駆使し、チームの再編成を行った。

「それじゃあ、オレはこんな布陣にしてみたぜ。ＣＯＭＰ起動！」
アツロウが呼び出したのは、魔獣ネコマタと鬼女リリム。どちらも露出度の高い美少女の姿をしている。
「この変態！」
問答無用でアツロウはユズに殴られた。
「ぐはっ⁉　ちょ、ちょっと待った、ユズ！　オレだけじゃねえって！」
アツロウは慌てて近くにいる主人公を指さす。
彼が召喚している悪魔は、エンジェルとピクシー……ピクシーは手の平サイズだが、どちらもやはり美少女姿である。
「これでどうかな、ユズ？　この仲魔たちだったら、パッっと見、悪いイメージはないだろ」
ユズの微妙な乙女心も分からず、主人公はあっけらかんとした笑顔を見せていた。
「主人公……」
肩を落とすユズの耳元で、リリムがささやく。
「主人公さんは、あなたよりもアタシたちの方がお気に入りみたいね」
「う、うるさい！」

「アハハハ！」
怒るユズから、リリムは飛んで遠ざかっていった。
そんな言い争いが起こっている一方、主人公たちが呼び出した悪魔の周りには人だかりができていた。
そのほとんどは男性である。
「ねぇ、きみ。ちょっとオレと遊びに行かない？」
「い、いえ……私は主人公さんと一緒に戦わなければなりませんので、遊んでいる暇は……」
エンジェルがさっそくナンパされていた。
「ねぇねぇ、この耳とシッポ、本物？」
「ちっちゃくてかわいいねぇ。ああ、きみこそオレの理想のサイズだよ、はぁはぁ」
アニメの美少女がプリントされたＴシャツを着た男ふたりに、ネコマタとピクシーが絡まれていた。
「お前ら、どこかに消えろぉっ！」
アツロウが一喝して、集まっていた数十人の男たちは、
「ちっ！　少しくらい、いいじゃねえかよ」

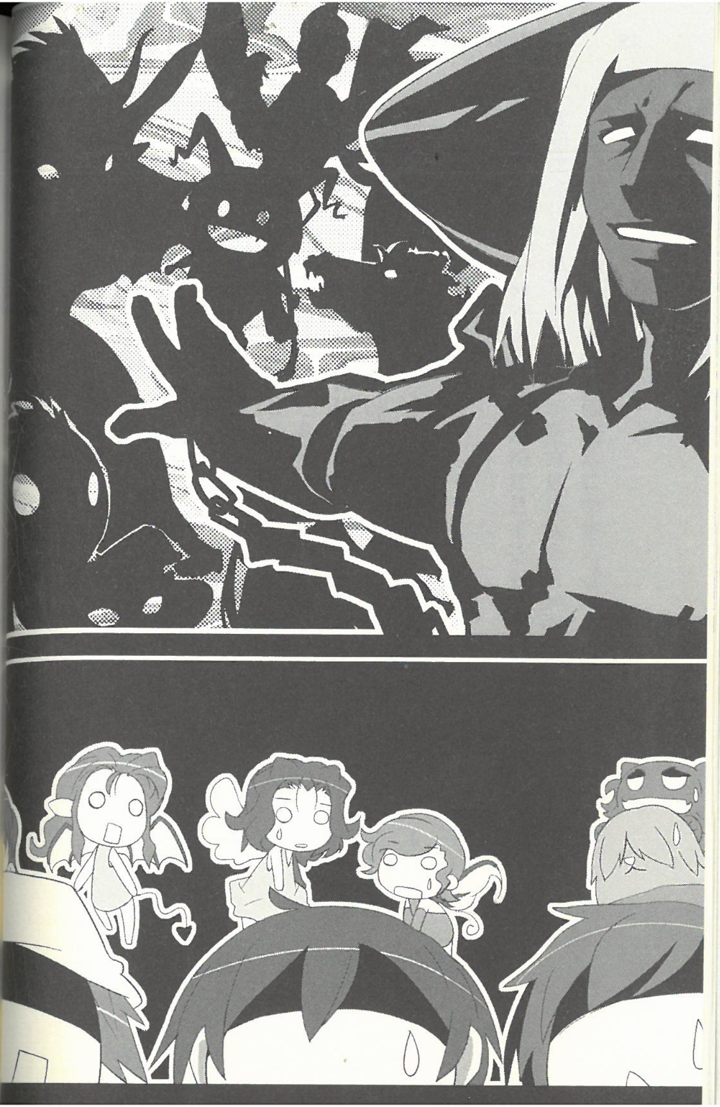
「なんだよ、うざってぇな」
などと、口ぐちに不満の声を漏らしながら、ようやく去っていった。
「……まぁ、それだけみんなからも人気があるってことだよ」
主人公の苦笑いに、ユズは首を傾げる。
「それでいい……のかなぁ？」
翌日――主人公、アツロウ、ユズは、青山霊園の入口に立っていた。
「よし、場所はここだね……時間もぴったりだ」
主人公がもう一度ラプラスメールを確認する。それによると、今日この時間、青山霊園にベル・デルが出現するらしい。
「あ！　地面が！」
ユズが霊園の中央辺りの地面を指さす。そこに奇妙な紋様が浮かび上がり、一体の悪魔が出現する。
「……時は満ちた。黄昏(たそがれ)の時間は訪れ、汝(なんじ)らは我がために涙するのだ。さぁ……始めようか、ニンゲンどもよ……。汝の血を我に捧げよ！」
ベルの王が一、ベル・デルの出現に合わせて、彼に付き従う悪魔も次々と霊園内に

姿を現す。
それに対抗し、主人公たちも仲魔を召喚する。双方の布陣は――。

ベル・デル側。
闘鬼メズキ、レベル20。龍王ペンドラゴン、レベル21。
鬼女ユキジョロウ、レベル24。妖精シルキー、レベル24。
妖精ジャックランタン、レベル24。魔獣ケットシー、レベル25。
霊鳥ヴィゾフニル、レベル25。邪龍バジリスク、レベル25。
ベル神ベル・デル、レベル30。
……平均レベル24。

一方、主人公側。
妖精ピクシー、レベル2。魔獣ヘアリージャック、レベル10。
天使エンジェル、レベル14。鬼女リリム、レベル15。
神獣シーサー、レベル19。魔獣ネコマタ、レベル19。
……平均レベル13。

「「「……」」」
　主人公たちは言葉を失い、顔を青くした。
「やっぱり、仲魔はイメージよりも強さだよな……」
「そうね……」
「ウベルリの鬼神双手とアバドンの混沌の波動があれば……」
　平均レベルに十以上の差があっては勝てるはずもなく、主人公たちは全滅寸前で青山霊園から逃げ出した。





オチない明星　第一話

新宿区永田町――政治の中心地たるその場所も、やはり悪魔たちの出現によって荒廃していた。

国会議事堂は空襲でも受けたかのように半壊し、地面は哀れに土を剥き出しにし、大気中には得体の知れない瘴気が漂っている。

しかしこの時、ただでさえ異様な雰囲気を漂わせる永田町は、さらに異常な空気に包まれていた。その理由は、一体の悪魔の降臨である。

桁外れの魔力。

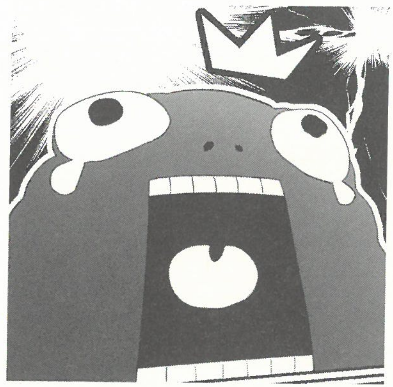
圧倒的な存在感。

通常の悪魔の数十倍はあろうかという巨体。

……ルシファーである。

まさに万魔の王と呼ぶに相応しき彼は、黒き翼を翻し、地面を揺るがして、その地に降り立った。彼の足元には無数の悪魔たちが付き従っている。

「ここに彼の者がいるのか……」



ルシファーは荒れ果てた地を一瞥して呟いた。
彼が魔界からこの地に降り立った理由は、驚くべきことにたったひとりの人間……主人公にあった。
「ソノヨウニ聞イテオリマス……」
ルシファーの言葉に応え、彼に付き従うデカラビアが答えた。
「ふふふ、主人公よ……人の子でありながらベルの王へと至らんとする者よ。汝ならば、我が声を感じ取ることができるであろう。さぁ、来るのだ……我が前に！」
——さぁ、来るのだ……我が前に！
「……ん？」
永田町を歩きながら、主人公はふと足を止めた。
彼の目は、どこかあらぬ方向を見ていた。友人のその様子を見て、アツロウが怪訝そうな顔をする。
「どうかしたのか、主人公？」
「いや、誰かに呼ばれたような気がして……」
アツロウだけでなく、ユズも立ち止まって主人公を見た。

「呼ばれた？　そんな声は聞こえなかったけど……？」
ユズはいぶかしむように眉を八の字にした。
主人公は声が聞こえた方向——国会議事堂を見た。そこに何か大きな存在がいるような……そこに行かなければならないような……そんな気がしたのだ。
しかし。
「まぁ、気のせいだよね」
主人公はにこやかにそう言って、再び歩き出した。
アツロウやユズもそれに頷く。
「そうだよ、気のせいに決まってるだろ。もう封鎖が始まって何日も経ったからな。疲れでちょっと神経質になってるんだよ」
「そうよ、落ち着いていこう。ね、主人公」
「……うん。ありがとう、ユズ、アツロウ」
主人公たち一行は口々に話しながら、再び歩き始めた。国会議事堂とは逆方向に。
「……来んな……」
ルシファーが永田町国会議事堂前に降臨してから一時間。確かに主人公が近くにい

ることをルシファーは感じ取っているのだが、一向に彼は姿を現さない。国会議事堂の前にたたずむ魔王の額には青筋が浮かんでいた。

「なぜ来んのだ、奴は……」

（い、イライラしてる……！）

（ルシファー様、思いっきりイライラしてるぞ……！）

ルシファーと共に人間界へ現れた悪魔たちが、ブルブルと震え出す。彼らの願いはただひとつ——。

（主人公さん！　早くここへ来てくださいいいいいっ！）

人間に対して、これほどまで強く懇願したことはなかった。

一方その頃、主人公、アツロウ、ユズは宮下公園にいた。

「よし、『火炎激化』をクラックした」

「お、これで主人公の火炎魔法がより強化されたってわけだな。オレはさっきのバトルでレベルが上がったぜ。ユズはどうだ？」

「アタシもレベルアップしたわよ」

彼らはフリーバトルの真っ最中で、国会議事堂に降臨した魔王のことなど、頭の片

隅にもなかった。

二時間後——。

「遅い……っ！」

ゴゴゴゴ……と地面が揺れ続ける。

「いったい、いつになったら来るのだ、主人公は……！」

ゴゴゴゴゴ……。

ちなみに、この揺れは地震などではなく、ルシファーの貧乏ゆすりによるものである。揺れのせいで、国会議事堂の一部が崩れ落ちた。

（ヒィイ……）

（ル、ルシファー様がお怒りだぞ……！）

苛立ちで地面を揺らし続けるルシファーを前に、下僕の悪魔たちは顔を上げることもできず、恐怖で震え続ける。

（コ、コノママデハ我々ガ殺サレル……！）

（早く来い、主人公～！）

その頃、主人公たちは——。
「く、このキャロルJって人、なかなか食い下がるね……」
「主人公、ここは思い切ってどーんと金額を上げてみたら？」
「オレもユズに賛成。この悪魔はどうしても合体に必要だしな」
彼らはCOMPを開いて、デビルオークションの真っ最中だった。
三時間後、国会議事堂の上空は暗黒に覆われ始めていた——日が暮れたせいで。
「……」
もはやルシファーは何も言わず、国会議事堂に腰を下ろしたままだ。巣に向かって上空を飛んでいくカラスたちが、「アホー、アホー」と声をあげる。
周囲にいる悪魔たちにとっては、ルシファーが無言である方が余計に恐かった。
その時、堕天使ムールムールが国会記事堂前に駆けつける。
「ルシファー様！　大変申シアゲニクイノデスガ……」
彼の顔にはありありと苦渋が浮かんでいた。
「主人公ハマダ、ベル神ヲ一体シカ倒シテオリマセン。例エ、ココニ訪レタトシテモ、我々ト戦ウニハ、時期尚早カト……」

——今日は封鎖開始から、まだ三日目だった。
（間違えたんだ……）
（ルシファー様……人間界に来る時期を間違えたんだ!!）
悪魔たちは誰もがそう思ったが、口に出すことはできなかった。まさか万魔の王であるルシファーの失敗を指摘するなど、できるはずがない。悪魔も縦社会が厳しいのである。
報告を聞いたルシファーは、無言で部下たちに背を向けた。今、彼がどんな顔をしているのか、うかがい知ることはできない。
「……」
やがてルシファーは再び悪魔たちの方に向き直り、ゆっくりと口を開く。
悪魔たちは主の指示を聞き逃すまいと全神経を研ぎ澄ませる。
問題は、主人公がこの場を訪れるまでの時間をどうやって潰すのか、だ。ロキのように人間に化け、彼らの動向に介入するのか。それとも、気まぐれにベル・ベリトを血祭りに上げるのか。
ルシファーの指示とは——。
「——主人公が来るまでの間、一発芸でもして私を楽しませろ」

「「「い、一発芸っ⁉」」」
悪魔たち全員の声が揃った。
「ちなみに、スベった者は容赦なく制裁する」
「「「容赦なく制裁っ⁉」」」

こうして、国会議事堂の前で一発芸大会が始まった。
ルシファーはいつの間にか国会議事堂前に玉座を持って来て、ばっちり下僕たちの芸を鑑賞する体勢になっていた。
そんな魔王の前に、一番初めに引き出されたのは堕天使デカラビアだ。
（コ、ココデ、ルシファー様ヲ楽シマセナケレバ、容赦ナク制裁！　滑ルワケニハイカナイ、滑ルワケニハイカナイ……！）
受験を前にした学生のように、心の中で「滑らない、滑らない、滑らない」と唱え続けるデカラビア。
今、目の前に「滑らないスリッパ」などの受験グッズがあったら、迷いなく飛びついているだろう——たとえ彼に足がなくとも。

（恥ヤ外聞ナド不要——今ハ命ノ方ガ大事ダ！）
そう心に誓い、彼は自らの芸を始める——。
「一番、デカラビア。ＵＦＯヲヤリマス！」
顔面からバタリと地面に倒れ、ぎゅるぎゅると回転を始めるデカラビア。ドンドンその速度は上がり、五芒星型の体が円形に見え始める。
もはや扇風機の羽のようだ。
「おお、面白いぞ！　もっとスピードを上げろ」
「ハイ、ルシファー様ニ喜ンデイタダキ、アリガタキ幸セ！」
面白がるルシファーに、デカラビアは笑顔を浮かべる。もっとも、内心は表情とは正反対だった。
（イダ、イダダダダ！　遠心力デ、ウ、腕ガ千切レル！）
しかしそんな感情など顔には出さない。もし苦痛を顔に滲ませ、ルシファーが興ざめしてしまっては命がない。
「ルルルルルシファーササママママ……コレレレデ終ワリデハハハハハアリマセンンン……」
デカラビアは高速回転のために震える声で、告げる。

（最後ノ締メ――コレヲ見セレバ、キットルシファー様モ爆笑確実！　制裁ハ逃レルコトガデキルダロウ！）
　そう思いながら、彼は地面を五本の腕で蹴る。回転によって生み出された揚力と相まって、デカラビアは凄まじい速度で宙に飛び上がった。それは、彼が芸のタイトルとしてつけた、『ＵＦＯ』と呼ぶに相応しい姿だった。
「おおおお、まさかお前がこんな特技を隠し持って――ムグっ⁉」
「アレ？」
　ルシファーの声が途中で途切れたことと、飛行が途中で止まってしまったことに、デカラビアは首を傾げる。
　彼は恐る恐る周囲を見てみる。
　すると――彼の体がルシファーの顔面に激突していた。
「……」
　ルシファーは無言で体を震わせていた。
「……ア、ハ、ハハ……」
　デカラビアは、まったくごまかしになっていないごまかし笑いを浮かべる。
　そんな彼に対し、ルシファーは厳かに告げた。

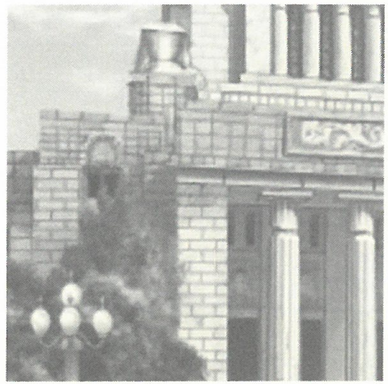
「……その体を風車に貼り付けて、延々と回し続けろ」
「待ッテクダサイ、ル、ルシファー様ァァ～～～ッ！」



パズス君のお仕え日記　第一話

その魂は力を求めていた。
何のための力か？
肉親を殺した存在に復讐するための力であり、大切な者を守るための力であり、『自分』を通すための力である。
二階堂征志、通称カイドー——彼は貪欲に力を求めていた。
その情念は悪魔にとって甘美な餌であり、彼らを魔界からおびき寄せるに充分なほど熟していた。

「ククク……。負けンのか……オレが……？　こんな奴らに負けンのかヨ⁉」
宮下公園に、カイドーの虚ろな笑いと声が響く。
彼と対峙する四人の悪魔使い……主人公、アツロウ、ユズ、ケイスケは、異常な雰囲気を漂わせる彼に、言葉を失っていた。
共闘していたホンダでさえ、今のカイドーに話しかけることは躊躇われた。それほどまでに彼の態度は切羽詰まり、危ういものだった。



事の始まりは、悪魔が出現した宮下公園で、カイドーたちと主人公たちが鉢合わせしたことである。
カイドーは主人公たちに『どちらがより多くの悪魔を倒すか』という勝負を持ちかけ、敗北した。
「こんなんじゃ……何も掴めねえ、何も……守れねえっ……！　チカラ……チカラだ、神でも悪魔でも、何でもいい！　何もかも！　すべてブッ壊せるだけの、強ぇチカラをよこしやがれッ……！」
カイドーの苦悩が言葉となって現れた瞬間――彼の背後から、『声』が聞こえた。
「見える、見えるぞ。お前の無念が……力を欲する、心の叫びがな……！」
人のものではありえない、威厳と悪意に満ちた声だった。そして雷のような光がカイドーの背後で爆発し――そこに人ならざる者が出現する。
人間の倍はあろうかという体格と、背から生えた翼は、彼が異界の生物であることを示していた。
その悪魔は、周囲にいる者を圧倒する妖気を放ちながら、召喚主であるカイドーに告げる。
「我は熱風の王、悪霊の主、邪神パズス。お前の願いを叶えてやろう……」

「くそっ！　このオレが、他人と仲良しごっこして満足な悪魔使い共に負けるなんてよぉ……！」
カイドーはパズスの言葉など微塵も聞こえていないのか、後悔と苦痛の言葉を吐き続ける。
「……ゴホン」
パズスは咳払いして、改めて言ってみる。
「我は熱風の王、悪霊の主、パズス。お前の願いを叶えて……」
「オレは、まだまだ強くならなきゃいけねえのに……！」
やっぱりカイドーは、パズスの言葉に無反応だった。
「……ゲフン、ゴホン」
再び咳払い。仕方なく、パズスは背後からカイドーの肩に手を置く。
「おいお前……私はパズスで、お前の願いを叶えるためわざわざ――」
「うるせぇっ！」



「アボギャ!?」
カイドーの裏拳一閃！　羽虫を払うような自然な動作だった。
拳に感触があってやっとパズスに気づいたのか、あっさりと昏倒する。
カイドーは地面に視線を落とした。邪神は白目を剥き、ピクピクと惨めに痙攣している。
「……なんだ、この弱っちぃ悪魔は？」

邪神パズス　レベル32
悪魔使いカイドー　レベル50

これが悪魔使いカイドーと邪神パズスとのファーストコンタクトだったという。





オチない明星　第二話

「エントリーナンバー一三番、魔王アリオク！　腹話術をやります」
日が暮れた国会議事堂前。
威風堂々とした巨体で玉座に腰掛けるルシファーの前に、アリオクが立っていた。そして彼の口から、ゆっくりと言葉が紡がれる。
「……あれ？　声が、遅れて、聞こえるぞ」
アリオクの言葉と口の動きがずれていた。
その代わり、アリオクの腹の口がパクパクと動いていた。隠そうとする様子もなく、動いていた。
ルシファーは、ひどく冷めた目をしてアリオクを見下ろしている。
しかし、そんなルシファーの様子など気づきもせず、彼は少し照れたように頬を赤らめて言う。

「……これがほんとの腹話術」

ルシファーは相変わらず絶対零度の視線を彼に向けながら、判決を告げる。

「――その口にフレイミーズを詰めろ」

「ヒィィッ⁉」

アリオクを拘束すべく、わらわらと他の悪魔たちが集まってくる。

「ふ、フレイミーズって、あれ、炎の塊（かたまり）じゃないですか⁉　待って、火傷（やけど）しますって、本当に！　やめ、やめて、助けてくれ～～～！」

だがアリオクの訴えはまったく無視される。ルシファー部下の悪魔たちにがっちりと両腕を固められ、彼はどこかへ運ばれていった……。



パズス君のお仕え日記　第二話

主人公たちとの勝負後、カイドーはパズスを連れて、住居に使っている廃ビルの一室へ戻っていた。

「で、何者なんだ、お前は？」

カイドーはソファーに背をもたれて座り、パズスはその正面の床に正座させられている。彼は恐る恐る、カイドーを見上げながら説明する。

「だ、だから、さっきから言っているように、私は悪霊たちの主、熱風の王と呼ばれる邪神パズスで――」

「あー、うざってぇ。悪霊とか熱風とか、口上が長ぇンだよ。お前はモヒカンで充分だ、モヒカンで」

「自分から何者だって聞いておいて、その言い方⁉　第一、これはモヒカンではないっ！」

頭の中央に一列だけ、モヒカンのように毛（？）が伸びている頭を指さしながら、パズスは訴えた。しかし、カイドーは興味なさげに「ふぅん」と呟くだけだ。

（くそっ……なんで私がこんな扱いを受けねばならんのだ……！）
　これでも邪神である。上位悪魔である。
　パズスにもプライドというものがある。
　確かにレベルはカイドーの方が上だが、本来、人間が悪魔に勝てるわけがない。さっきカイドーに負けたのは、不意を突かれただけに違いない――そう自分を奮い立たせ、パズスはカイドーに力の差を思い知らせるべく、殴りかかる！
「邪神が人間に負けるか、地にひれ伏すがいいいぃぃぃ――痛ぁっ！　スイマセンでしたぁ！　自分チョづいてました！　ウジ虫のくせに反抗してすみませんでしたぁ！」
　地にひれ伏していたのはパズスだった。
　正座から立ち上がりもしないうちに、彼はカイドーのケンカキックを顔面に喰らって倒されていた。さらに、靴の裏でグリグリと顔面を踏みにじられ、後頭部を床にこすりつけられる。
「か、カイドーさん……自分が何をしたっていうんですか……？」
　思わず下っ端口調になるパズス。邪神の頭を踏みつけながら、カイドーは平然と答える。
「いや、なんとなく反抗しそうな雰囲気をしてたからな、てめぇ」

（お、恐ろしい……この男、殺気だけで私の行動の先を取るとは……。しかし、こいつは知らぬであろう。実は私が、まだ奥の手を隠し持っていることを……！）
　パズスの奥の手とは、邪神だけが持つ種族専用スキル『混沌の波動』――離れた場所にいる者を遠隔攻撃できる能力である。
　この力を使えば、今のように足で踏み倒されたままの状態から、不意をついてカイドーを攻撃することができるのだ。
（クックック、この男が格の違いを思い知り、後悔に涙する姿が目に浮かぶわ……）
　踏みつけられながら内心でほくそ笑み、パズスは『混沌の波動』を発動させる！
「今度こそ……邪神が人間に負けるか、地にひれ伏すがいいぃぃぃぃ――――！」



ぺちり
「？　なんだ、こりゃあ？」
カイドーは自分の頬をさする。
まるで猫じゃらしか何かで殴られたような反応だった。
（き、効いてないぃぃぃぃぃ――――!?　なんだ、さっきの弱そうな効果音は!?）
これほどまでに能力に差があるとは、パズスもまったく予想していなかった。
「まさかとは思うけどヨ、さっきのはオレを攻撃したのか……？」
踏みつけてられいるパズスに冷たい視線を向けつつ、カイドーが問いかけた。パズスは視線をさまよわせる。
「え、え～っと……」
「オレを、攻撃、したのか？」
カイドーは一節一節、確認するようにパズスに問う。
「……は、はい。攻撃しました」
グリグリグリグリ。
「イダダダダダ、すいやせん！　ホンット、すいやせん！　もうしませんから、カ

イドーさん！」
さらに強く顔面を踏みつけられ、パズスは涙を流しながら情けない謝罪を繰り返した。その姿があまりに哀れだったせいか、カイドーはパズスの顔を踏みつけるのをやめる。
そして、ニヤリとほくそ笑んだ。
「さっきの遠隔攻撃……てめぇみたいなザコはバトルには使えねぇが、その能力は使えるな……」
「おい、パズス。向こうに落ちてる雑誌を取ってくれ」
「はい、カイドーさん！」
「暑ぃから、そっちの窓を開けてくれ」
「この窓っスか、カイドーさん!?」
「うお、ゴキブリがいるじゃねーか。駆除しとけよ」
「任せてくださいよ、カイドーさん！」
廃ビルの一室に、カイドーの命令とパズスの返事が響き渡る。パズスの『混沌の波動』を使えば、遠くに置いてあるものを簡単に取ってくることができる上に、ゴキブ

リのような触れにくいものを殺すことも容易だ。

しかし——。

（わ、私はこれでいいのか……？）

『混沌の波動』で窓を開けながら、同時にゴキブリを追い回すパズスは、自分の現状に疑問を抱かざるを得ない。

今やパズスは完全にカイドーの使いっパシリだ。いつの間にか、下っ端口調もすっかり板に付いている。

「おい、パズス。ゴキがまだ生きてンぞ」

「すいやせんした、カイドーさん！　今すぐに駆除しますんでっ！」

考え込んで手が止まっていたパズスは、再び使いっパシリ業を再開する。

（邪神の私が……ゴキブリ駆除……）

パズスの脳裏に、かつて魔界にいた頃の記憶が蘇る。『悪霊の主』と呼ばれ、彼に従う悪魔も多くいた。周囲の悪魔たちから向けられる畏怖の視線と尊敬の声……それらを受けながら、パズスは魔界を闊歩していたのだ。

『ぱ、パズスだ！　パズスが通るぞ！』

『みんな、目を合わせるな！　無言で頭を下げるんだ！』

パズスに畏怖し、道を空ける低級悪魔たち。

『ふはは、私は熱風の王、悪霊の主、邪神パズス！　我に従うか、そうでない者は目障りとならぬよう、この場から離れておくんだな！　はーっはっはっは！』

「——はーっはっはっは！」

「うっせぇぞ、何笑ってンだ！　さっさと働きやがれ！」

「痛っ！　マジ、すんません！」

回想がつい口に出ていたパズスはカイドーに殴られ、またゴキブリを追い始める。

（なんで私は……人間界などに来てしまったのだ……）



オチない明星　第三話

幾度か夜が明け、日付も変わった。しかし、国会議事堂前の一発芸大会は、未だに続いていた。

今回指名されたのは、ドラゴンの体に豚の頭部を持つ邪神、オーカスである。彼はルシファーの前に立ち、その巨体を見上げていた。

「オーカスよ、お前はどうやって私を楽しませてくれるのだ？」

「はい、エントリーナンバー四四四番、オーカス！　物真似をやります」

オーカスはルシファーに向かってちょっとだけ顔を突き出し、フガフガと鼻を膨らませる。

「……豚の真似」

辺りを沈黙が支配した。

永劫とも思える数分後、沈黙を破ったのはやはりこの場を支配する王、ルシファーだった。



「そのままではないか……！」
「あ、あの、ルシファー様？　怒らないでください！　これ、ほんの冗談ですから！　こ、これからが本当！　本気の本気！　次の物真似は、すごいんですよ！　こ、子豚の真似をします！　豚ではなく子豚ですよ⁉　ほら、すごいですよね⁉　だからお許しを、ルシファー様アアアッ！」
　他の悪魔たちによって力ずくで運ばれていくオーカス。
　その後、彼の姿を見た者はいない……。



パズス君のお仕え日記　第三話

「パズス、そこにある菓子を取ってくれ」
「はい、コレっスね、カイドーさん！」
「ふん。お前の混沌の波動は、やっぱ便利だな。じゃあ次はそっちの缶ジュースだ」
「はい、どうぞ！」
「その後はどっかの店で焼きそばパンを買ってきてくれ」
「いや、それ、混沌の波動とか関係ないパシリっスよね⁉」
　ダイモンズが活動拠点として使っている廃ビルの一室に、今日もカイドーとパズスの声が響き渡る。
　すっかりカイドーのパシリが板に付いているパズス。
　しかし、それを良しとしない者がいた――カイドーが率いるカリスマチーム、ダイモンズのメンバーである。
　彼らは廃ビルの別室に集まって、車座になって話し合っていた。
「最近のカイドーさんは、パズスとばかり仲良くしている！」
　ダイモンズ結成当初よりメンバーだったリーダー格の男が拳

を握りしめて訴えた。

「「そうだ、そうだ！」」

ダイモンズの他メンバーも賛同する。

ダイモンズはひとり残らず、メンバー全員が嘆いていた――今のカイドーとパズスの蜜月を。パズスはカイドーの舎弟化してしまったとはいえ、ダイモンズのメンバーとは別格扱いだ。

そして今やカイドーはダイモンズメンバーを必要とせず、パズスだけを使っている。またパズスもダイモンズとは関わりを持とうとしない。カイドーにはパズスしかおらず、パズスにはカイドーしかいない。

これを蜜月と呼ばずして、何をそう呼ぶのか。

「由々しき事態だ。このままでは我々はカイドーさんにとって不要な存在となってしまう！　我々は取り戻さなければならない――」

「そうだっ！」

「取り戻さなければ！」

「――カイドーさんの、パシリという立場を！」

ダイモンズメンバー十数人が、カイドーのいる部屋にぞろぞろと入ってきた。相変わらずカイドーはソファーに座ったままで、パズスがその足下の床をぞうきん掛けしていた。

「ん？　お前ら、なんか用か？」

チームの部下たちの大仰な登場に、カイドーは怪訝そうに眉をしかめる。

「用があるのは、カイドーさんじゃないっス」

「そっちのパズスっス！」

ダイモンズメンバーたちはパズスを指さし、口々に言う。

「最近の……最近のカイドーさんはパズスとばかり仲良くして……！」

「僕らのことをどう思ってるんですか⁉」

「いや、どう思ってるも何も――」

カイドーは戸惑い、返事に詰まった。しかし、ダイモン



ズのメンバーはカイドーの答えも待たずに言い募る。

「だから自分ら、パズスに勝負を申し込むっス！」

「オレたちの方がパズスより優れてるってことを、証明するっス！」

「ほう……」

それを聞いたパズスは、ぞうきん掛けを中断してニヤリと笑った。

（ふふ、人間にもなかなか骨のある者がいるではないか。悪魔使いでもなく、この私に敵うはずがないと分かっていながら、勝負を挑んでくるとはな！）

「いいだろう、受けて立とう！　勝負方法はお前らが自由に選べ」

それはパズスからのハンデだった。

そして同時に自負でもあった。多数対一でも、相手の有利な戦い方でも、自分が人間に負けるはずがない、とパズスは確信している。

ダイモンズたちの中で一番前に出てきていた、リーダー格らしき男が口を開く。

「勝負の内容は――」

（さぁ、どうやって戦うのだ⁉　今やすっかりパシリ業が板についてしまったが……かつては『熱風の王』と呼ばれていた我が力、見せてやろうぞ。血の雨を降らせてやる――）

パズスは勢い込んで鼻息を荒くする……が、彼らの提案はパズスにとってあまりにも予想外だった。

「勝負の内容は――どっちがカイドーさんの喜ぶものを持ってくることができるか⁉　名付けて、『パシリ勝負』だ！」

血の雨も『熱風の王』としての力も、関係なさそうだった。

「よし、行くぞ、お前ら！」

「カイドーさんの一番喜びそうなものを探すんだ！」

「「応っ！」」

「……おい」

ダイモンズメンバーがぞろぞろとカイドーの部屋から出て行くのを、パズスは呆然と見送っていた。

「はい、なんでしょう、カイドーさん⁉」

突然主に呼ばれ、パズスはビクリと体を震わせて振り返った。

「言っとくけど、負けるのは許さねぇからな」

「なんですか⁉」

「最近オレは、テメェの忠誠心ってヤツが疑わしくてな。テメェは隙あらば、オレの寝首をかこうとしてンじゃねーか？」

ギクリ、と体を震わせるパズス。

「な、何言ってンスか、カイドーさん。自分のこのタテガミには、カイドーさんへの忠誠心が詰まってるっスよ！」

「本当かヨ？」

カイドーは眉間にしわを寄せ、疑わしげに言う。

「とにかく………負けたらテメェの忠誠心の証とかいう、そのモヒカンを毟るかンな。いいな？」

「ひでぇっス！　自分の忠誠心が！　それに、モヒカンじゃねえっス！」

（――とは言うものの、本当は忠誠心などあるわけがないのだが）

廃ビルから出たパズスは、悪魔が出現したせいですっかり荒れ果ててしまった街を歩きながら、考える。

（しかし、負ければまたカイドーに殴られるぞ……何か、あいつの喜びそうなものは……あいつが一番望んでいるものは……そうだ、アレにするか！）

パズスは思いついたものを求めて、早足に歩き始めた。

「カイドーさん！」

一時間後――部屋に戻ってきたダイモンズメンバーたちは、カイドーの座っているソファーの前に一斉に跪いた。

まるで王に謁見する使節団のようだ。

その中のひとりが、カイドーに対して顔を上げた。

「自分ら、カイドーさんの喜びそうなものを持ってきたっス！」

「そうっス！」

自分たちの勝利を確信しているかのような自信あふれる声に、カイドーは「ほう」と口を開く。

「いろんな店を回ってきました！　もうほとんどの店が閉まってたんで、見つけるのに苦労したっスよ！」

「そうっス！　最高級のモンを見つけてきたっス！」

「最高級？」

いったい何を持ってきたのだろうか、とカイドーは首を傾げる。高級食材の料理で

も調達してきたのだろうか。
（確かに最近、ロクなもん食ってなかったから、うまい飯だったら、ありがたいかもな――）
「――って、なんだ？　こりゃあ？」
カイドーは部下たちが持ってきたものをしげしげと見つめる。
「ツナギっス！　素材は最高級の牛革、帯電防止・超撥水性能付き！　みんなでお金を出し合って買ったんスよ！」
「カイドーさん、いつもツナギ着てますから、きっとカイドーさんにとってツナギは重要なものっスよね！」
「でも東京が封鎖されて、カイドーさんは着替えてないから、ここでツナギが必要だと思ったっス！」
メンバーが口々に言う。
「カイドーさん、うれしいっスよね!?」
「うれしくねえよっ!!」
カイドーは一蹴した。
その時、部屋の出入り口に何者かの気配があった。

ダイモンズのメンバーたちは咄嗟に振り返る。そこに立っていたのは――上級悪魔、邪神パズスだった。
「愚かなニンゲンども…………お前たちは主の望んでいるものさえ分からないのか？　笑止」
「な、なんだと……？」
パズスの言葉を聞いて、ダイモンズメンバーたちは後ずさる。
「だったらお前は、分かるっつーのかヨ!?」
「分かるとも」
そう言ってパズスがカイドーに差し出したのは――メモリーディスクだった。彼は主に向かって説明する。
「カイドーさん……メモリーディスクには、様々なスキルが入ってるっス。カイドーさんが求めるものは、ズバリ、力！　だったらメモリーディスクを持ってくるのが一番いいと思ったっス！」
パズスからディスクを受け取り、カイドーは少しだけ満足げな笑みを浮かべた。
「へっ、分かってるじゃねえか、パズス。これで役に立つスキルが入ってたら、テメェは合格ってことにしてやンヨ」

実際に使ってみるまでは、メモリーディスクに何が入っているか分からない。これはそういったものだ。カイドーはさっそくＣＯＭＰとディスクを接続して、中身を確認しようとする――。

「イラッシャーイ！」

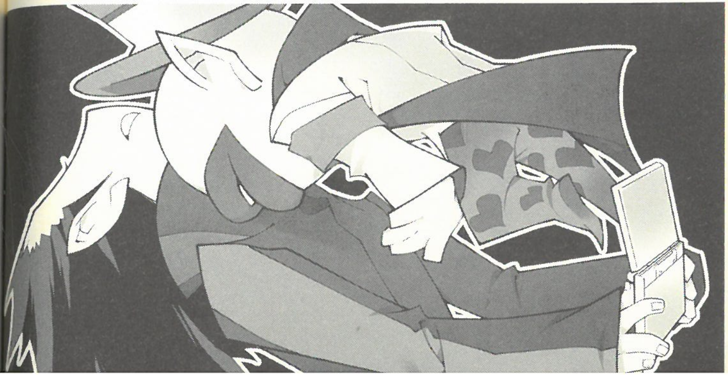
――だがその瞬間、メモリーディスクから飛び出した奇妙な生物が、カイドーの顎(あご)に見事なヘッドバッドを喰らわせた。

出てきたのはシルクハットを被った小男……魔人ゴーストＱだった。

顎のダメージでうずくまるカイドー。

だがそんなことにはまったく気づかず、ゴーストＱは喋り始める。

「ココにイアワセたニイさんタチは運がイイ！　メモリー



ディスクに隠したオタカラをサガスのだ！」

「……」

カイドーは無言でゆっくりと立ち上がり、ゴーストＱの前に立った。

しかし、やはり雰囲気も読まず、ゴーストＱはわけの分からないことを喋り続ける。

「ココにはオタカラが隠してアルのだ！　意気込みはケッコウだが、ハズレもあるぶぎゅっ⁉」

言葉の途中で、カイドーの拳がゴーストＱの顔面にめり込んだ。

「さて――」

床に横たわるゴーストＱ。

それを放置して、カイドーはパズスに目を向けた。

メモリーディスクにゴーストＱが入っていることなど、パズスはまったく知らなかったのだが、カイドーを攻撃する結果になったのは確かだ。パズスは判決を待つ大罪人の気持ちで体を縮こまらせる。

（ああ、絶対にまた殴られる……）

――だがパズスの予想に反して、カイドーは軽い苦笑いを浮かべるだけだった。
「ゴーストQとかいうヤツのせいでケチがついちまったけどヨ。テメェはオレが望んでるものを理解してやがった。だから……今回の勝負は、パズスの勝ちだな」
その判決に、ダイモンズのメンバーたちはがっくりと膝をつく。
「くっ……」
「負けた……」
「ちくしょう……」
「悔しいっス……」
カイドーはねぎらうように、パズスの肩に手を置いて言う。
「テメェの忠誠心、偽物じゃなかったみてぇだな」
その言葉に、パズスは満面の笑みを返す。
「当然っスよ、カイドーさん！」
こうして誇りと存在意義をかけたパシリ対決は、パズスの勝利で幕を下ろしたのだった。

（これで私は、カイドーのパシリ筆頭として認められたわけだな……。ああ、何やら感慨に浸ってしまうぞ……）
ダイモンズメンバーたちがうな垂れて部屋から去った後、パズスはニヤニヤと笑みをこぼしながら、カイドーから命じられたぞうきん掛けを再開していた。
……。
「……ん？」
…………。
「……んん？」
ふと、彼は違和感に気づいた。
「私は別に、カイドーに気に入られようとしていたわけではないだろうが！」



オチない明星　第四話

「エントリーナンバーァァァ、六一六番、レギオンンンンンン！
ミンナデ一遍ニィィィ喋ルンダァァァァ〜〜〜」

無数の顔を持つ赤黒い球体が、空中を浮遊しながら喋る。

国会議事堂前、魔王ルシファーを楽しませるための一発芸大会は、まだ続いていた。

「ウオオオ〜オデハ〜〜〜」

「給食ノ揚ゲパンガ〜〜〜、大嫌イナンダアア〜〜〜」

「ウオオオ〜〜〜〜」

「ウオオオオオオオ〜〜〜〜〜！」

「ウオオオ〜〜〜〜〜！」

四つの口から、ただひたすらに叫び声が響く。

ルシファーのこめかみがピクピクと震えていた。

しかし、そんなことも気にせず、レギオンは叫び声をあげ続ける。

ただひたすらに——。



「ウオオオ〜〜〜〜！」
「オオオオオ〜〜〜〜〜！」
「やかましいわぁっ！」
ルシファーの拳一撃で、レギオンは吹っ飛ばされた。

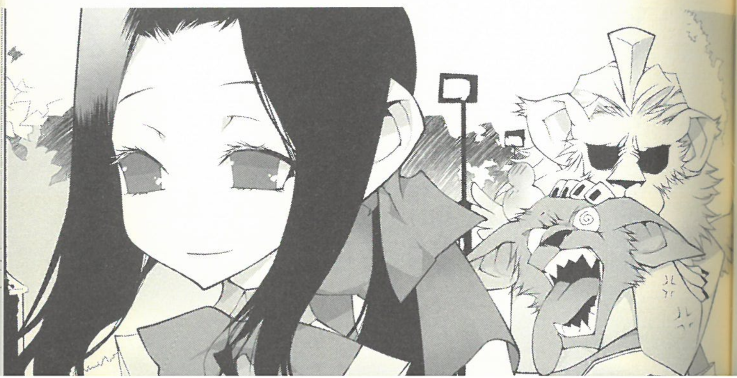


パズス君のお仕え日記　第四話

その日、カイドーは部屋の中で古びたソファーに座りながら、腕を組んで眉間にしわを寄せていた。
「……オレが直接守るとか言ってもマリ姉は納得しねぇだろうし……誰か別のヤツに護衛を……けど、相手は悪魔だしな……」
ぶつぶつと呟く主の姿を見て、部屋のゴミ拾いをしていたパズスは手を止めた。
「どうしたンスか、カイドーさん？」
「パズスか……そうだな」
カイドーは彼をジッと見つめて来た——まるで品定めでもするかのように。
（な、なんだ、カイドーさん……？）
パズスは困惑する。
数分後、品定めを終えたのか、カイドーははっきりとした口調で命じた。
「お前、マリ姉の護衛をやれ」
「護衛!?　マジっスか!?」

「なんでそんなにうれしそうなんだ、お前は……？」
パズスは宝くじに当たったように明るい顔をしていた。
「いや、自分、今までパシリしかやってなかったもんで……護衛っていったら、パシリよりもずっと高級そうな仕事じゃないスか！」
パズスはゴキブリの駆除を命じられ、焼きそばパンを買いに行かされた時のことを思い出す。
（それに比べたら、人間の護衛はずっとやりがいのある――って、だから違う！）
パズスはブンブンと首を振る。
（なんで人間を襲う側である上級悪魔の私が、人間の護衛をして喜んでいるのだ⁉）
たった数日で、パズスは骨の髄まで下僕意識が染みついていた。
「まぁとにかくよ、絶対にマリ姉から眼を離すなヨ。主人公から聞いた話だが、マリ姉はクドラクとかいう悪魔に狙われてるらしいからな……。とにかく、怪しい野郎がマリ姉に近づいたら、容赦なくぶっ飛ばせ」
そうして今、パズスは表参道を歩くマリを尾行していた。
（カイドーの命令を聞かないわけにはいかないからな……そうだ、私は別にニンゲンの護衛を喜んでいるわけではないのだ。命令だから、仕方なくやっているだけだからな！）

ツンデレ風に自分の行動を正当化しながら、パズスは電柱の陰に隠れてそっとマリの姿を確認する。
すると、そこで棍棒を持った犬男――コボルトが曲がり角から現れ、マリの背後に近づいていくのが見えた。因縁をつけようというのか、コボルトの顔に薄ら笑いが浮かんでいる。
（む！　今こそ護衛たる私の出番であろうっ！）
パズスはコボルトに近づいていく。一方、犬男はそんなパズスに気づかず、マリに声をかける。
「おい、人間の姉ちゃ――ングゴッ⁉」
コボルトに鉄拳を喰らわせて黙らせた後、パズスは彼を一瞬でポストの陰まで運び、身を隠した。
「な、何すんだてめ――って、パ、パズスさん⁉　な、何してるんですか、こんなところで⁉」



コボルトが驚くのも無理はない、パズスほどの上級悪魔ともなれば、彼のような低級悪魔にとっては恐怖と畏怖の対象である。
それが表参道に普通にいるのだ。無理もない。
「私は今、あの女の護衛をしている。手を出せばただでは済まさんぞ」
「護衛⁉　あの悪霊の主と恐れられたパズスさんが、なんでそんなことを？」
目を見開いて聞いてくるコボルトに、パズスは説明しようとする……。
『この世界に召喚されてすぐに、人間に手も足も出ずに敗北してな。舎弟にされて使いっパシリにされて、今回初めて人間の護衛というパシリ以外の命令を言い渡され、ちょっぴり喜びながらその任務に当たっているのだ』
……と、説明しようとして、自分が言わなければならない内容のあまりの情けなさに、パズスは硬直してしまった。
「すまん、コボルト……私の口からは説明できん」
「な、何か大変な理由があるんですね…………いや、あるにちがいないっス。分かりました、これ以上は聞かないっス」
声を潜め、真剣な顔でコボルトは頷く。
本当はただひたすら情けないだけの理由なのだが、邪神の威厳にかけて真実を告げ

るわけにはいかない。
「……頑張ってください。オレ、応援してるっスから！」
「う、うむ……」
パズスは曖昧に頷くことしかできなかった。

一方その頃、パズスたちがいるポストから数メートル後ろの曲がり角には、吸血鬼クドラクが身を隠していた。
「なんだよ、なんだよ、なんなんだよ、ふひひゃああ！　あんなトサカヤロウがウロウロしてたら、クルースニクをぶっ殺せねえじゃねえかよおおお！　あいつとクルースニクが協力して、二対一になっても面倒だしよぉぉ！」
なんか対策を考えねぇとなぁ、と悔しげに呟きながら、クドラクは宙を舞い去っていった。

「うむ……あのコボルト以来、悪魔は現れんな。マリとかいう女の周りにも、特に怪しい者はいないし……」
パズスはコボルトが去っていった後も、マリの尾行を続ける。

「これでは護衛の仕事をやろうにも、やりようがない。まるでサボっているようではないか」

何か、自分がきちんと任務を果たしていることを証明する方法はないか考えつつ、パズスは辺りを見回す。

すると彼の視界に、『超速！　三十分で現像！』というキャッチフレーズを載せた看板が映った。

「そうか……これだ」

カイドーはソファーに座ったまま、パズスからの献上物を眺める。

「パズス……これはなんだ？」

「自分が尾行してる間の、マリさんの行動を記録した写真とレポートっス！　自分がきちんと任務を果たしていると証明するために持ってきやした！」

カイドーの手の中にあるのは、パズスが撮ったマリの写真と、マリの行動を記録したノートだった。

「……」

カイドーは考え込むように、その写真とノートを凝視していた。カイドーからの返

事はない。

（やはり無理か……いくらなんでも、こんな写真とレポート程度では、私がマリをきちんと護衛していた証拠にはならんだろうし……）

やがて、カイドーが口を開いた。どんな叱責が飛ぶのか、とパズスは首をすくめる。しかし――。

「……よし、護衛を続けてくれ」

カイドーはさりげなくその写真を懐にしまった。

「と、ところでよ、クドラクっつー悪魔は現れたのか？」

慌てたようにカイドーは早口で次の話題に移る。

……ツッコむと殴られそうだから、パズスもカイドーの行動に敢えて何も言わず、その話題転換に付き合う。

「クドラクの野郎は一度も姿を見せてないっスね。きっと自分とカイドーさんに恐れをなして逃げたと思うっす」

「そうか。けどまぁ、もうしばらくマリ姉を守ってやれ。……写真付きの報告を忘れずにな」



「……はいっス」

翌日――カイドーは表参道で偶然、マリに出会った。彼女は何かを警戒するように、キョロキョロと周りを見回しながら歩いている。

「マリ姉」

密かに想いを寄せる相手に、カイドーは動揺しつつ声をかけた。だがもちろん、そんな心の動きは表には出さない。

「タダシ君……」

「どうかしたンかよ？　挙動不審だぜ。ストーカーにでも追いかけられてるのか？」

本当はクドラクのことを主人公から聞いていたが、カイドーはマリに自分が悪魔使いであることを話していない。そんなことをすれば、マリが彼を心配することが分かり切っているからだ。

しかし、これは冗談のつもりだった。

パズスがマリを護衛しているのだから、彼女がクドラクに悩まされることはないはず、とカイドーは思っていた。

しかし――。

「そうなのよ、実は、ちょっと変な男が……」

マリは小さくため息をついた。

（何……？　まだクドラクの奴がマリ姉を狙ってやがるのか？　っつーか、パズスの野郎は何やってンだ、ちゃんと護衛してねぇのか？）

眉をしかめるカイドーに、マリが自分の後ろをちらちらと振り返りながら、背後にある電柱をそっと指さす。

「あ、ほら。今もいるわ」

声を潜めるマリの指の先にいたのは――モヒカンで、全裸で、背中から翼が生えている何者かがいた。

どこからどう見ても『変な男』――パズスだった。

「あの変質者のせいで、最近は外に出歩くのもなんだか怖くて……」

「イテェッス、カイドーさん！」

廃ビルの一室に戻り、パズスはカイドーに殴られていた。

「服を着ろ、モヒカンを切れ、羽を外せ！　お前の格好は怪しすぎるんだよ！」

「いだだ、引っ張らないで！　この頭と翼は自分のアイデンティティっス！　取れね

えっス！」
「あいでん……？　わけ分かンねえ言葉使ってんじゃねぇ！　だったらせめて服を着ろ！　全裸で歩くな！」
「ごふっ⁉　大丈夫っス、自分だったら警察から職質を受けても、そいつら全員薙ぎ払えるっスから！」
「そういう問題じゃねえ！」



オチない明星　最終話

ルシファーが地上へと出現して、どれほどの時間が過ぎたか……。
今、再び街は夜を迎え、完全な闇に落ちていた。
栄光を奪われ、闇に生きることを運命づけられた悪魔たちに相応しい時間——永田町国会議事堂前で繰り広げられる饗宴は、未だに続いていた。
「腑甲斐ないな、お前ら……」
天を突くような巨体を誇る魔王が、配下の悪魔たちを見下ろしていた。
主人公が来るまでの暇つぶしとしてルシファーが始めた一発芸大会——彼を楽しませようと挑戦した者は、実に総勢六六六体を超えた。
三日間もの間、ルシファーの前で彼らは一発芸を演じ続けたのである。
しかし、誰ひとりとして完全にルシファーを満足させた者はいない。魔王の笑いは、安くないのである。

「お前らは一発芸というものが分かっていない。私が手本を見せてやろう」

ルシファーの言葉に、悪魔たちの間でざわめきが起こった。

——ル、ルシファー様が一発芸？

——イッタイ、ドンナ技ヲ見セテクダサルノダ？

——あの巨体で、素晴らしいブレイクダンスを披露するとかじゃねえか？

——愚か者！　そのような下らぬことのわけがあるまい！

——そうだとも！　きっと我々では思いもつかないような、抱腹絶倒確実な芸に決まっている！

膨れ上がる期待を一身に受け、ルシファーはおもむろに右手を前に突きだした。

拳を握りしめ、人指し指だけを立てている。

その姿はあたかも、自らが唯一の存在であり、神に等しき者であることを主張しているかのようだった。

「マ、マサカ……！」

「そうか、ルシファー様が見せてくださる芸とは、神に対する反逆……！」

「確かにそれは、ルシファー様にしかできぬ、窮極の芸！」

「今までの一発芸大会などというお遊びは、これから始まる神への反逆の前振りだったのだ！」

「ならば私は、ルシファー様と共に神と戦うぞ！」

「オレモ戦ノ準備スル……！」

ザワザワ、ザワザワ！

部下の悪魔たちが息巻く中、ルシファーの右手がゆっくりと動き……立てた人指し指で自分の耳を倒した。

「——餃子」

魔王は、地獄の統率者に相応しき威厳あふれる声で、そう言った。

「……？」

「……？」

「……？」

その場にいた悪魔たちは、ひとり残らず頭に『？』を浮かべていた。何が起こったのか、分からなかった。ルシファーが何をしたかったのかも、分からなかった。自分たちがなぜここにいるのかさえ、疑問に思えてきた。

その時、国会議事堂前に堕天使ムールムールが駆け込んでくる。
「ルシファー様！　大変申シ上ゲニクイノデスガ……」
彼の顔には、ありありと苦渋が浮かんでいた。
「……主人公タチハ我々ノ存在ニ気付カズ、バ・ベルヲ……撃破シタ模様デス……」
ルシファーが降臨して数日——待ち人、来たらず。
ムールムールの報告を聞き、ルシファーは配下の悪魔たちに背を向け、ぽつりと呟いた。
「還るか、魔界へ……」
他の悪魔たちも、一斉に頷いた。



パズス君のお仕え日記　最終話

「やはり、現状を静観しているわけにはいかない……」
ダイモンズのメンバーは、再び一室に集まって話し合っていた。
「最近のカイドーさんは、以前にも増してパズスばかりを使っている！　パズスさえいれば、他には何もいらないという状態だ！」
ダイモンズ結成当初よりメンバーだった、リーダー格の男が高らかに声をあげて訴えた。
「「そうだ、そうだ！」」
「由々しき事態だ。このままではダイモンズの存在意義がなくなってしまう！　我々は、カイドーさんの第一の舎弟という立場を取り戻さなければならない！」
「「その通りだっ！」」
「しかし、そのためにはどうすればいいンすかね？」
メンバーのひとりが挙手して疑問を提示する。

　しかし、そんな質問など予想していたかのように、リーダー格の男は口元に笑みを浮かべた。
「既に方法は考えてある――オレに任せろ！」
「まったく、なぜ邪神の私がこのようなことを……どうせ廃ビルなのだから、汚れなど放っておけばいいのだ！」
　カイドーが留守にしている間に、ビル中を掃除しておくよう言い渡されたパズスは、ぶつぶつと文句を言いながら箒で部屋を掃いていた。今日も今日とて、パズスは舎弟業に精が出ている。
「クソっ、こうなったら集めたゴミとホコリをチリトリで取らずに、ソファーの下に押し込んで隠してやるぞ。いつかソファーの下を覗き込んだ時、びっくりするがいい、カイドー！」
　行動までみみっちくなっているパズスだった。
「パズスっ！」
　パズスがゴミをソファーの下に押し込み終わった時、部屋の出入り口から威勢のいい声が響いた。パズスが振り返ると、そこにはダイモンズのメンバーたち十数人が立

っている。
「何か用か？　ニンゲンども」
　ダイモンズの面々を見下しながら尋ねるパズス。カイドーには完全敗北し、絶対服従の状態となっている彼だが、さすがにただの人間であるダイモンズには少しも怯まない。
「テメェは……いつもいつもカイドーさんと仲良くしやがって……」
「今日こそは、オレたちのカイドーさんを返してもらうぞ！」
「「「そうだそうだ！」」」
「「「絶対に奪い返してやる！」」」
　ダイモンズメンバーたちは口々に叫ぶ。
「ほ～う……？」
　パズスとしてはカイドーなど熨斗をつけて返してやりたいぐらいだが、彼らの『奪い返す』という言葉が気になった。上級悪魔として、人間ごときに『奪われる』のはプライドが許さない。
「では、どうやって奪い返すのだ？　この前のように、パシリ勝負でもするのか？」
「いいや、もうそんなまだるっこしいことはしない――」

ダイモンズメンバーの先頭にいる、リーダーと思われる男が、力を溜めるように一度言葉を切り、そして力強く宣言する。

「力ずくで奪い返す！」

（――面白い！　『悪霊の王』と畏れられ、『熱風の王』と怖れられた私が、まさかニンゲンごときに正面から宣戦されるとはなっ！）

部屋の掃除などしている場合ではない。

パズスは持っていた箒を放り投げる。

「良かろう、受けて立つぞ！　お前たちは瞬く間に我が前に倒れるだろうが、その蛮勇だけはを誉めてやろう！」

パズスの魔力が高まっていく。

全身から放たれる魔力によって、部屋が揺らぎ、老朽化した壁に亀裂が走り、窓ガラスが割れた。

圧倒的な力と威厳――これが邪神パズス、本来の姿である。

常人ならば卒倒、失禁を免れないであろう威圧感の中で、しかし、ダイモンズのメンバーは退かず、怯まず、恐れず、地に足をつけて立っていた。

「ふふふ、素晴らしい胆力だ、ニンゲンよ。だが、お前たちが命を失うという結果に

変化は――」

ない、と言おうとしたところで、パズスは状況の急変に目を剥いた。

ダイモンズメンバーたちが、一斉にＣＯＭＰを取り出したのだ。

邪神パズス　レベル45

ダイモンズメンバー（総勢十七名）　平均レベル48

パズスは顔をひきつらせる。

「お前たちが命を失うという結果に変化は――ありそうですね助けてくださいぃぃ～～～～!!」

そしてダイモンズのメンバーたちは、一斉に彼へと襲い掛かった。

（なぜこれほどまで高レベルなのだ、こいつらは……!?）

見下していた人間たちにボコられながら、パズスはその疑問だけは解けなかった。

「おう、帰ったぞ」

カイドーが部屋に戻ると、中の様子は以前と大きく変わっていた。

　これまで、パズスとダイモンズのメンバーたちは、ほとんど不干渉だった。しかし今――。

「おい、パズス。オレたちにジュース買ってきてくれや」

「はい、分かりました！」

「あ～、食糧を調達に行くんだったら、ついでにカップ麺か何か買ってきてくれよ」

「わ、分かりやした！」

「それなら、オレの分も何か食べ物を頼むぜ、パズス」

「へい、了解しやした！」

「ちっ、悪魔と戦って服が汚れちまったぜ。おいパズス、どっかから着替えを持ってきてくれ」

「はい、調達してきます！」

　ダイモンズのメンバー全員に、パズスは使いっパシリとして使われていた。

「何やってんだ、お前？」

　カイドーが、買い出しに行こうとしていたパズスに話しかけた。パズスは涙目で振り返って、カイドーを問い詰める。

「どーして！　どーしてあいつらが！　あんなに強いンスか、カイドーさん！」

　パズスは、部屋の中で寝そべったりソファーに腰掛けたりしているダイモンズメンバーたちを指さした。

「ああ、戦ったンか？　あいつら、翔門会の連中からCOMPを集めまくってたから、今じゃちゃんと悪魔使いになってンだろ。それと、なぜかあいつら『見覚えの成長』スキルを持っててな。オレが戦った分の経験値が勝手に溜まりやがるから……相当強えぞ」

「説明するのが遅すぎっス！　もう、魔界に還りたい！　助けて、主人公さん！」

　山手線の封鎖が解けるまで残りわずか……。

　封鎖解除後、パズスが魔界に還って平穏な暮らしを送れるかは、主人公が悪魔の帰還を望むか否かに掛かっているのだった。





イケメン警察官の事件簿　始動編

俺は本庁所属の警察官。

名前は……そうだな、「池面（いけめん）」とでも呼んでくれ。何、ダサい？　だったら鷹山（たかやま）でも大下（おおした）でもなんなら本城（ほんじょう）でも好きなように呼んでくれればいいさ。

あるとき山手線が封鎖されるなんていうことが起こった。それに巻き込まれた俺は羽織と下駄（げた）の男からＣＯＭＰとかいう機械を渡された。

そいつが言うには、この機械を持っていれば、封鎖を生き延びられるらしい。

別にそんなことは信じちゃいなかったが、もらえるものは貰っておくのが俺の主義。どんなものかと起動してみれば、いきなりバケモノが俺に襲い掛かってきやがった。

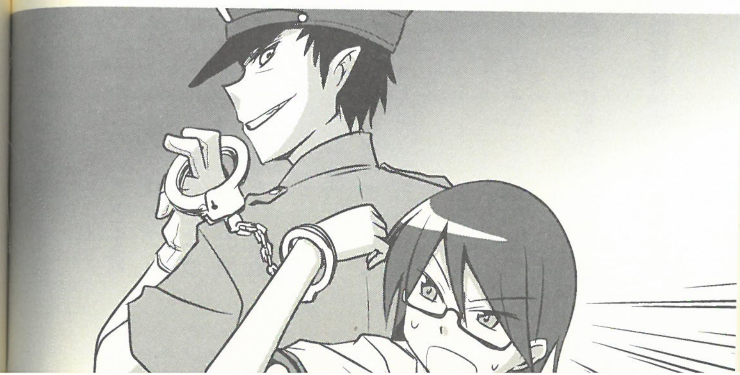
とりあえず反抗的だったんでブチのめしたら、契約がどうとか言って機械の中に消えていった。これでこいつが呼び出せると知ったのは後の話。



それから、今まで見たことのないバケモノ、悪魔とやらが街のあっちこっちに出没するようになりやがった。
別に目障りなだけだったら無視してただろうが、俺に襲い掛かってきたんでとりあえずそういった奴らは返り討ちにしていた。
そんなこんなで数日。
いつものように俺は散歩という名のパトロールに出かけていた。
食事の心配こそあるものの、それ以外は別段することもない。
売られた喧嘩を買って時間を潰していると、遠くの方から大勢の人間が逃げ出してくるのが見えた。
何事かと思い、先頭を走っていたオッサンを捕まえて事情を聞くことにした。
「オイ、オッサン。向こうで一体どんな祭りが行われているんだ？」
「な、なんだアンタ！　いいから放せ。命が危ないかもしれないんだ！」
「オイオイ、職務質問に逆らうなんてなってないぜ。このままブタ箱にぶち込まれたいか？」
「!?　あ、アンタ警官だったのか!!　だったらはやくあいつを何とかしてくれ！」
「あいつ？」

「向こうで暴れている若い男のことだよ！　裁きがどうこうとか分からないことを言い出して馬鹿でかい悪魔と一緒に暴れていやがるんだ！」
言うだけ言ってさっさと逃げる男にイライラしつつも、俺は人込みを逆流するように騒ぎのあった地点へと向かった。
到着して最初にみつけたのが、閻魔大王みたいな奴とそのそばでＣＯＭＰ片手に高笑いしている、眼鏡をかけたガキ。
なにか喋っているようなので、耳を澄ませて見れば、
「お前たちみたいな、コロコロと態度の変わるようなクズどもは、僕とヤマで裁いてやる！」
などと中二病っぽいことを言っているのが聞き取れた。
（最近のガキは口先だけは達者だな）
そんなことを思いつつ、俺は街路樹の陰に隠れながらじりじりとそいつとの距離を縮めていた。
正面からぶつかりあうのはアホのやることだ。わざわざ相手の目の前に出る必要はない。俺が狙うのはただ一つ、あいつのＣＯＭＰだ。
絶好のポジションにたどり着いた俺は、気取られないように証拠品の押収倉庫から

ガメてきた自動拳銃を取りだした。
「ほら、オマエも。せっかく助けてくれた人間に石を投げたんだろう？」
「己の生死を省みることなく目先の恐怖に囚われるもの、判決、死刑！」
ガキと悪魔は、こちらに気付くこともなく、次々と逃げそこねた奴らを追い回している。
そんな姿を横目に俺はＣＯＭＰに向けて拳銃を構えると、慣れた手つきで引き金を絞った。
「⁉」
轟く銃声。舞い散るプラスチックと金属片。呆然とするガキ。消滅する悪魔。
身を隠す必要のなくなった俺は、眼鏡のガキの手を捕まえるとそのまま拘束する。
「うわぁっ！　くそっ！　なにをするんだっ！　放せっ！」



「はいはい。言い訳は豚箱でわめけばいいんじゃねえか」
「放せっ！　ヤマ！　でてこいっ！」
先ほどの悪魔の名前か？　呼び続けているが、一向に出てくる気配がない。当たり前だ。依り代壊された奴が、なにもない状態で出てこれるわけがない。
「えーっと、器物破損、恐喝、暴行の現行犯な」
そう言って手錠をかける。
「ボクが何をしたっていうんだ！」
「今、罪状挙げただろうが。胸に手を当てて考えるんだな」
なおもガキは暴れ続けるが、俺は気にせず近くの警察署へとそいつを引きずるように連行していった。

――本日14:00　高城圭介　逮捕　ミナサ■よい一日ヲ



夜闇族(ミディアン)の集い

「ん……、ふ、ふぁ……」

公園の路上で寝返りをうつ一人の少年。

その傍(かたわ)らには、彼と同年代と思われる少女が苦しげな顔をして眠っている。

山手線内が封鎖されてから数日。

己の寿命を延ばすため、悪魔を使役して自らの運命を切り開き続けている少年たち。

だが、その悪魔の力を持ってしても、柔らかな寝床を確保することは叶わず、路上での生活を続けざるを得ない状況が続いていた。

もちろんそんな中で満足に眠れるはずもない。寝返りをうった拍子にどこかにぶつけたのか、肩を押さえながら少年がのそりと起き上がった。

「っ痛～。やっぱりアスファルトは駄目だなぁ……」

しばらく肩を揉みほぐしてから再び横になるも、一度冴(さ)えて



しまった目は容易に眠ることを許さなかった。

仕方なしに辺りを見回すと、かすかな違和感を覚える。見れば、共に行動をしている仲間の姿がない。

「あれ……。アツロウがいない。トイレかな」

起きているならちょうどいい、眠くなるまで話し相手になってもらおう。そんなことを考えながら戻ってくるのを待つ。

だが、予想に反して五分待っても十分待っても、目的の相手は帰ってこない。時間が経過するごとに、どんどんと疑念が広がっていく。

（……何かに襲われた？　いや、ラプラスメールにはそんな事書いてなかった。でももしかしたら……）

膨らんだ疑念を拭いさることが出来ず、少年は傍らで寝ていた少女に声をかけた。

「ユズ、起きて。大変なことになったかもしれない」

「……ふぇ？　…………きゃぁっ⁉」

寝ぼけていたのか、間近にあった少年の顔に驚いたのか、少女が悲鳴を上げて飛び退る。

「なななに⁉　ダメだよ主人公。私たちまだ高校生なんだからっ……」

「何言ってるのさ。そんなことよりアツロウの姿が見えない」

「で、でも主人公が望むなら…………は？」

「だから、アツロウが居なくなったみたいなんだ」

固まるユズをよそに、主人公が話を続ける。初めのうちは理解が及んでいなかった彼女の顔が、だんだんと変化していく。

「ト、トイレとかじゃないの？」

「違う。オレが気付いてからもう二十分以上経ってるのに、一向に戻ってくる気配がない」

「それって……」

「強力な悪魔に襲われているかもしれない。アツロウが心配だ。探しにいかなきゃ」

「うん！」

二人で協力して、いなくなったアツロウの姿を探す。電気の消えた東京は暗く、また悪魔達も本領が発揮されるのか、昼間より活発に動く。手分けをしてあたるのは危険と判断した二人は連れ立って夜の街を走り出した。

無用な戦いを避けながらアツロウの姿を探す。公園内から外へとどんどん捜索範囲が広がっていく中、ユズが何かを発見した。

「主人公！　あれ！」
　声をかけられた主人公が振り向くと、元はコンビニだったと思われる店舗の中にボンヤリと浮かぶ白い帽子が目に入った。
「アツロウっ！」
　駆け寄りながら声をかけると、相手の動きが途端に慌てたかのようにおかしくなる。
「あれ、主人公？　ソデコも一緒でどうした？」
「どうしたじゃないでしょ！　あんたがいきなりいなくなったから探してあげたんじゃない！」
「そうだよ。起きたら姿が見えないから、どうしたのかと思って」
　ユズの剣幕に押されながら、アツロウは素直に謝罪の言葉を口にした。
「すまんすまん。時間が時間だから起きてこないだろうと思ってた」
「悪魔に襲われたのかと思ったわ。いったいこんなところで何をしていたのよ！」
　ユズから最もな指摘が飛ぶ。
　だがアツロウは口ごもってしまいそれどころではない。そんな二人に冷静になってもらうため、主人公がアツロウを諭す。
「オレもユズも心配したんだよ」

「う……。ごめんなさい」
「ユズも落ち着いて。無事だったんだから、まずはそれを喜ぼうよ」
「まあ、そうだけど……。でもホントにこんなところで何してたの？」
　ユズの問いに申し訳なさそうにアツロウが答えた。
「実は……立ち読みしてたんだ」

「「立ち読み!?」」

　思いもかけない返答に二人の声が揃う。
「いやあ。オレって基本夜型だからさ。いっつもコレくらいの時間になると小腹が空いてコンビニに行ってたんだよね……。そこで夜食ついでに立ち読みもしてたんだけどさ」
「「…………」」
「習慣になってることってなかなか抜けないのな。封鎖のおかげで飯がないのはわかってるんだけど、つい来ちまった」
　頭を掻きながらそんなことを告げるアツロウを前に、ユズの肩が小刻みに震える。

「こ……んのアホロウ！　馬鹿じゃないの⁉　こんな状況でよくそんなことが言えるわね‼」

「別にいいだろ！　ソデコが風呂に入りたいって言ってるように、オレにはこれが必要なんだよ！」

「お風呂と一緒にしないでくれる⁉」

「まあまあ、二人とも落ち着いて。確かにアツロウの言いたいことも分かる」

　言い争う二人を宥(なだ)める主人公の言葉に、今度はユズが驚いた。

「なにが分かるの？　アツロウがアホだってことだけじゃない」

「それは違うよユズ。ここまで日常が壊れてしまうと、少しでも以前の生活に戻りたいというのは当然のこと。それはユズだってそうでしょ。今のアツロウは自分の失われた日常を少しでも取り戻そうとしてるんだと思うよ」

　自分の行動を省みたのか、ユズがしょんぼりとうなだれた。

「ゴメンねアツロウ。よく考えたら私も散々ワガママ言ってるんだよね。それなのにアツロウばっかり責めちゃって……」

「い、いや、別にいいんだってそんなことくらい」

　このままでは沈み込みそうなユズを慌ててフォローするアツロウ。

　だが内心では、（なんとなく足が向いただけなんだけどな～）と思っていたが、空気的に言いだせずにいた。

「まあ、こんなところに長居してたら悪魔に襲われないとも限らない。早めに公園まで戻ろう」

　そう言って主人公が移動を促(うなが)したところで、ユズが何かに気付いた。

「主人公‼　あれ‼」

「⁉」

　指差した先を見ると、数体ほどの悪魔がこちらに向かってくるのが分かった。見つからずに脱出できないかと考えるが、既に距離が近づきすぎていて、逃げられそうにない。

　そう判断した主人公は、ＣＯＭＰを取り出し戦闘態勢をとった。それを見たユズも慌ててＣＯＭＰを取り出す。

「アツロウ、敵だ。この距離じゃ身を隠すことも逃げることもできそうにないから、倒すしか方法は……アツロウ？」

　主人公がＣＯＭＰを出すように促すも、アツロウは一向に動く気配がない。それどころか、ラックから雑誌を物色している。



「アツロウ、まさかＣＯＭＰが無いのか？　だったらどこかに隠……」
「ん？　いや、あるぜ？」
そう言って鞄を叩く。
「じゃあ早くしなさいよ！」
「ああ、あいつらなら大丈夫だ」
「え？」
問答をしてる間にも悪魔達は近づき、ついには店内まで入ってきた。その視線はアツロウのほうへと向かっている。慌てて召喚をしようとするが、既に悪魔はアツロウの隣まで近寄っていた。その手が高々と振り上げられる。
「アツロウ‼」
ユズが悲鳴を上げる。だが次の瞬間信じられないことが起きた。
悪魔の手が向かった先は——雑誌。
見れば他の悪魔達も雑誌やコミックに群がっている。主人公達を気にしているものは一体もいない。
料理雑誌をめくるニスロク。ファッション誌を熟読しているヘイムダル。
海賊もののコミックを読んでいるケットシー。そしてＰＣ雑誌を眺めるアツロウ。

不意にアツロウが雑誌をラックに戻して場所を離れた。すかさず他の悪魔がそのスペースに入り、ラックを漁っている。

呆然とその様子を眺めていると、アツロウが二人に声をかけた。

「な。大丈夫だったろ」

「うん……。でも、なんで？」

「実をいうとさ、オレここで一回あいつらに襲われたんだよ。そのときたまたま持ってた雑誌があいつらの目の前に落ちたんだ。そしたら何でかあいつらの興味を引いてさ。それで、立ち読みの作法とかを教えてやったら……あんな感じ」

ある種整然と悪魔達が並んでいる姿は異様としか思えない。今も誰かが移動するたびに他の悪魔が収まっていく。

確かに人間だと思えば見慣れた光景に見えなくもない。

「今までサーバーを探そうとしてたけどさ。こんなことが出来るんなら、共存するって事も出来なくは無いかもな」

爽やかな顔でそう告げるアツロウに、主人公もユズも言葉を返すことが出来ない。

その沈黙を肯定と受け取ったのか腕を組んで、

「やっぱり大切なのは理解することだよなー」

などと言い出している。

「じゃ、オレももうちょっと読んでから戻るわ」

そう言ってアツロウが悪魔の群れへと違和感なく収まる。

そこには混乱などはなく、悪魔達もそれを当然のように受け入れていることが見て取れた。

「ねえ、これも『日常』って言うのかな」

「さぁ……」

ポツリと呟いたユズの声に答えることも出来ないまま、二人はそのまま立ち読みの光景を眺め続けた。



イケメン警察官の事件簿　接触編

俺は本庁所属の警察官。

名前は……そうだな、「池面」とでも呼んでくれ。何、ダサい？　だったら大門でも高見でもなんなら青島でも好きなように呼んでくれればいいさ。

「ふわぁ……」

大あくびをしながらぶらぶらと街を巡る。

東京が封鎖されてから略奪や暴動などが多数報告されている。だから俺がこうやって目的もなく歩いていることも立派な警邏になるわけだ。

時折現れる悪魔を適当にいなしながら街を歩いていると、なにやら人だかりがあるのに気が付いた。

このあいだのように逃げているわけではない。どちらかといえば進んで集まっているような雰囲気。

『……これは神の試練なのです！　この試練を乗り越えてこそ、神は我々を……』



オレンジの服を纏った少女が、取りまきをつれてなにか演説をしているらしい。こんな暑い最中ご苦労なこった。

だが神の試練とは恐れ入る。

人は自分ではどうしようもなくなったときに神に縋るらしいが、その縋る先がわざわざ蹴り落としにくるとは世の中も大概腐ってる。

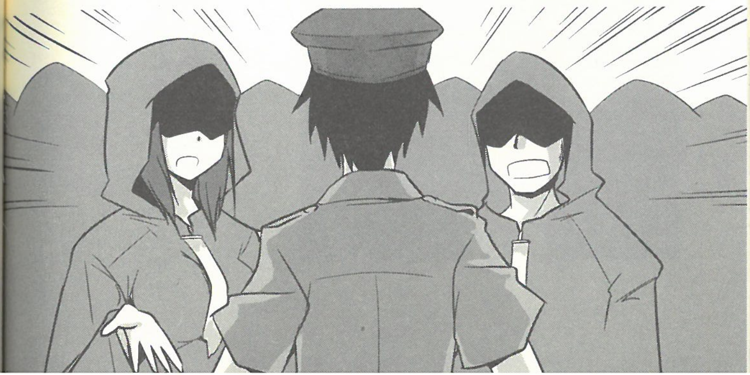
聞くとはなしに聞いていた演説だが、だんだんとイライラしてきた俺は、警邏帽を目深に被りなおすと、人込みを掻き分けて最前列へと割り込んだ。

「警察だ。お前たち誰の許可を得てここでこんなことをしてやがる」

手近にいたオレンジ服に詰め寄る。

「我ら翔門会は、東京封鎖という異常事態に対し……」

「聞こえなかったのか。俺は誰の許可を得たか、って聞いているんだ。いいか？　道路交通法で、無断で公共の道路等を占拠した場合道路不正使用となる。そんなことも知ら



ないのか」

「今はそのような場合では……」

イラついた俺の言葉にオロオロと対応する翔門会。あまりの剣幕に押されたのか周りにいた一般人達も、いまや遠巻きに俺を見ている。

『どうしました』

「アマネ様！」

気が付けば、壇上で演説を打っていた奴がこちらを向いていた。マイクを近くの奴に渡し、俺の方へと向かってくる。

その大物ぶった感じに、俺のイラ立ちは頂点へと達していた。

「先ほどからなにか騒いでいらっしゃったようですが、私どもになにか不手際でもありましたでしょうか」

慇懃無礼な態度が鼻に障る。

「オマエがここの親玉か。聞きたいことがある。ちょっと同行してもらおうか」

「警察の方が何用ですか。私たちはこの封鎖を生き延びるに当たり……」

俺がわざと緩めに手を掴むと、思ったとおりにそれが振り払われる。

「よし、反抗したな。公務執行妨害だ」

期待した反応にほくそ笑んだ俺は、懐から手錠を取り出した。

それを見て、当の本人よりも周りの信者どもが激昂(げっこう)した。

どこに隠していたのか次々とＣＯＭＰを取り出し悪魔を召喚する。

「きさまいきなり何をっ⁉　アマネ様お逃げ下さいっ！」

「公務執行妨害の現行犯。ああ、封鎖がどうこう言ってたからその点についても事情聴取させてもらおうか」

そんなことを言いながら俺も悪魔を召喚する。

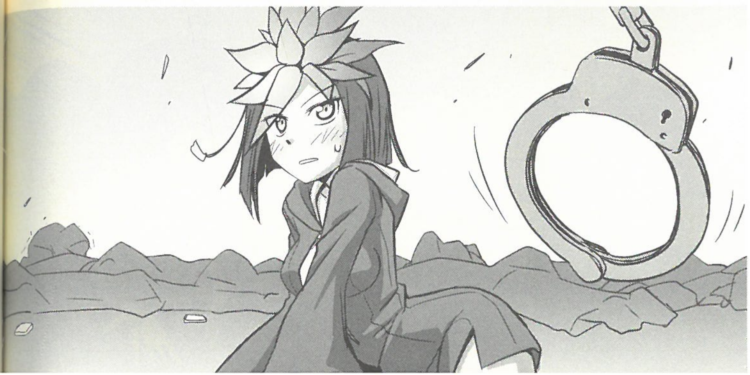
突如現れた悪魔にギャラリーたちは一目散に逃げ出していた。期せずして広い空間が出来上がる。

そして、翔門会の悪魔を全滅させるのにそう時間はかからなかった。

この時の俺は愉悦の笑みを浮かべてたかもしれない。

「ま、まさか貴様ベル・デルの……」

「訳の分からないことを言っているな。薬物使用の可能性



まで出てきたぞ？」

最後の女神が消えたのを確認し、ニヤニヤと笑いながら倒れ伏した信者達を見下ろす。気付けば残っているのは俺とアマネだけになっていた。

「さて。大人しくしょっ引かれるか、怪我と一緒に連れて行かれるか。どっちがいい？」

「……くっ」

「まあ、俺一人じゃ手が回らないからな。お仲間は見逃してやるよ」

しばらく考えたアマネは、逃げられないことを悟ったのかゆっくりとうなだれる。

その両手に俺はしっかりと手錠をかけた。

――本日11:30　九頭竜天音　逮捕　ミナサ■よイ一日ヲ



兄（おや）の心、弟（こ）知らず

手からＣＯＭＰがこぼれ落ち、同時にその周りにいた悪魔達が次々と消滅していく。
　自分の不利を悟ったリーダー格の男は辺りを見回すが、仲間たちも同じようにＣＯＭＰを取り落としており、助けにこれるような者は誰もいない。
「くっ、くそっ！　憶えてやがれ！」
　己の敗北を悟った男は捨て台詞と共にどこかへと逃げ出してしまう。
　それを見て、男の仲間も士気を崩壊させ、バラバラに逃げていった。
「ふーっ。さっきの人たちも無事だったみたいだし、なんとかなったな」
「アツロウ、お疲れ様」
　アツロウが自身のＣＯＭＰを操作して悪魔を送還していると、傍らにいた少年がねぎらいの声をかけた。
「おう。オマエも無事だったみたいだな」



「なんとかね」
「でも、これから先あんな奴らとやりあうことになるんだろうな……」
　自分の欲望のために悪魔を使役するようになった一部のものたち。そんな外道悪魔使いを追い払ったのもつかの間、アツロウはそのことを気に病んでいた。
「こんなときだっていうのに、自分のことしか考えてないって奴らだもんな」
「仕方ないよ。オレたちはオレたちのできることをやろう」
「……そうだな」
　気を持ち直したアツロウは、もう一人の仲間の姿が見えないことに気がついた。
「あれ？　ソデコは？」
「ソデコって言うな！　ここよ」
　声のしたほうを振り向けば、少女がやってくるところだった。見ればなにやらちょっとした量の荷物を持っている。
「アンタたちが回収してなかったから、私が集めてきたわよ」
　そう言って差し出したのは、先ほど男たちが落としていった数台のＣＯＭＰ。
「おっ、悪いねソデコちゃん」
「ありがとうユズ」

「まったく……。いくらあいつらを追い払ったって、これをもってかれちゃ意味がないじゃない」
　荷物を下ろしながらそんなことを言うユズ。
　ＣＯＭＰは悪魔の召喚元となり、これを持つ限り悪魔使いとして再起することが可能となる。
　ユズの言うことは最もな話であった。
「ところでこれ、どうしようか」
「まあ壊れてるんだからそのままでも………ん？」
　なんの気なしに集めたＣＯＭＰを見ていたアツロウが、その内の一台をおもむろに拾い上げる。よく見ればその電源は消えておらず、召喚用の画面が表示されたままとなっていた。
「コイツは壊れてなかったみたいだな。あれ、こっちのやつもだ」
「これも普通に動くみたいだね」
　改めて確かめると、破壊されておらずそのまま使用に耐



えうるものがいくつか残っている。

一緒に集めた物の調子を見ていたユズがおもむろに声を発した。

「あのさ………」

数日後。

「久しぶりだな我が弟よ」

「ナオヤ！」

「ナオヤさん！」

「なんとかここまで無事に生き延びられたようだな」

一行の前に、この封鎖の謎を知る男、ナオヤが現れた。不敵な笑みを浮かべ、ゆっくりと近づいてくる。

「いったい何が目的な……」

「そんなことより弟よ。何故俺のメールに返答しなかった」

一行の言葉を無視するかのようにナオヤが発言を被せる。その声はかすかに震え、なにやら怒りを隠しているかのようにも聞こえる。

「何を言っているのかわか……」

「俺が何回メールを送ったかわかっているのか」

「こっちの話も聞けよ！　メールなんか届いていないよ」

「なんだと……？」

この答えは予想外だったのか、怪訝（けげん）な表情を浮かべるナオヤ。

「俺の構築したシステムに問題があったとでもいうつもりか。ＣＯＭＰを見せてみろっ！」

掴みかかるようにしてＣＯＭＰを奪おうとするナオヤに抵抗していると、傍らにいたアツロウが膝を打った。

「あ、分かった。ナオヤさん、前のアドレスに送ってたでしょう」

その言葉にナオヤの動きが一瞬止まる。急に抵抗がなくなったことでバランスを崩した少年の手から、ＣＯＭＰが転がり落ちた。

それを視線で追ったナオヤの動きが今度は完全に停止した。



「なんだアレは」

ゴテゴテとした装飾、特殊な形状に変化したフレーム、なにかの意匠が施されたカバーなどなど。ナオヤがユズに渡しておいたものとは明らかにちがう物体がそこにはあった。

飛ばされたCOMPを拾い上げたユズが、ナオヤに告げる。

「だって、ナオヤさんがくれたの、ダサいんだもん」

そう言うと懐から自分のCOMPを取り出す。

ユズのものは様々なデコレーションが施され、カバーも大枠から変更されて、シールなどが貼られている。

「そうそう。いくらなんでもノーマルなやつなんて、最近流行らないっスよ」

アツロウのCOMPは邪鬼ロアが意匠化されたようなものが本体に刻まれており、そこからケーブルらしきものがのびている。驚愕に目を見開き振り向くと、ユズからCOMPを手渡された少年が深く頷いていた。

「大体ナオヤは流行りを気にしなさすぎなんだよ」

「周りに流されないとか、聞こえはいいけどね～」

「ちょっと浮いてるんだよな」

「羽織だし」

「下駄だし」

「マントっぽいし」

口々に痛烈な批判を述べる三人。すぐそばにいるにもかかわらずその舌鋒は止まる気配を見せない。

そんな言葉を聞いていたナオヤは、震える手を払うと高らかに告げた。

「フッ、フハハハハッ！　なかなかやるようになったな。ではまた会おうっ！」

そういって足早に去っていく。

そんな姿を呆然と眺めていると、誰かがポツリと呟いた。

「逃げた……」

先ほどまでナオヤが立っていた場所のアスファルトには、小さな水滴の後が残っていた。





イケメン警察官の事件簿　邂逅編

俺は本庁所属の警察官。

名前は……そうだな、「池面」とでも呼んでくれ。何、ダサい？　だったら亀山（かめやま）でも杉下（すぎした）でもなんなら古畑（ふるはた）でも好きなように呼んでくれればいいさ。

「ちっ、つまんねえ怪我しちまったな」

屍（しかばね）の散乱する中、召喚した悪魔に治癒魔法をかけてもらいながら、そうひとりごちる。

いつもの散歩……もとい警邏に出ていた俺は、油断をしていたせいか悪魔の奇襲を受けることとなった。

幸いすぐに対応することはできたものの、手持ちの悪魔では実力が拮抗（きっこう）していたためか、思わぬ怪我をしてしまった。

「そろそろ俺も、悪魔の強化が必要か……」

今まではそれなりになんとかなっていたが、ここ最近、悪魔が急に増えてきた。寿命のカウントダウンも進み、今の戦力じゃ正直心もとない。



「マッカは充分稼いでるはずだからな。ちょっと片っ端から落札してみるか」
手近な場所に腰を下ろし、俺は早速ＣＯＭＰを開いてデビオクへとアクセスを開始した。
「全部をまとめて攻撃する手段が欲しいな。回復手段もあればそれに越したことはないし……」
我ながら独り言が多いが、口に出さないと整理できない性分なのでそれは仕方ないと思っている。
ともかく目に付いた悪魔があれば、即座にオークションに参加する。
はじめは真面目にオークション参加をしていたものの、途中からそれも面倒になり、次々と即決でオークションを決めていく。
そうやっているとオークションランクも上がり、より強力な悪魔を競り落とすことが出来るようになる。
そんなことを何度か続けながら、次々と落札していく。きっと他の参加者たちに恐れられていることだろう。
「コイツも落札完了。さて次は……」
ここで俺は一匹の悪魔に目が止まった。

すぐさま無言でオークションを開始。
即決ではなくまともにオークションに参加し、じわじわと値を吊り上げていく。
ほかの奴の動きが止まったところで、今度は一気に即決価格を出す。
ひとしきりオークションをおちょくっていると、ＣＯＭＰから先ほど競り落とした悪魔が現れた。
「私の名はヘイ………」
「お前に用はない。失せろ」
無表情でそう言って、契約をせずにオークションを終了する。現れた悪魔は訳が分からないという顔のまま消えていった。
「…………よし」
すぐさまオークションを再起動。
再び今契約を断った悪魔を探し、競りを開始。今度はいきなり即決額を出して、悪魔を呼び出す。
「私の名はヘ……」
「失せろ」
そしてまたも契約を完了せず送り返した。

　その後も、評価ランクだけは下がらないように維持しつつ、その悪魔を見つけては競り落とし、そして契約を断って送り返すことを黙々と続ける。その悪魔に対しては一片の慈悲も存在しない。

　何十回目になっただろうか。

　ついにその悪魔が爆発した。

「私の名はへ……ってまた貴様か！　いったいなんなのだ人間！　私になにか恨みでもあるというのか！」

「お前なんぞに恨みはない。なにを勘違いしていやがる」

「ならばなんだというのだ！　何度も何度も落札しては契約を切りおって。私の力が必要なのではないのか」

「テメェの力なんざ借りるつもりはまったくない」

「なんだと……!?」

　俺の本心からの言葉に、青かった悪魔の顔色が赤黒く変色していく。

「どうした。役立たずの烙印を言い渡されて、生意気にも怒っているのか？」

「私を侮辱するとはいい度胸だ。大体貴様、この幻魔族のエリートたる私の何が不満だというのだ」

「テメェの名前が気に食わん」

　この悪魔のオークションの登録名は『イケメン★ヘイムダル』。

「テメェごときがイケメン名乗るなんておこがましいにも程がある。本当のイケメンっていうのはな、俺みたいな奴のことを言うんだ。分かったらとっとと登録名を変えるんだな。そうだな、テメェみたいなのなら『オカマ★ヘイムダル』とでも名乗ればいいんじゃないか」

　一呼吸置いて続ける。

「まあ、そんな奴はどっちにしろ使わないけどなぁ！」

「我ら悪魔に操られるような存在が何をほざく！　貴様こそ、その狭量（きょうりょう）な精神を恥じたらどうだ！」

「カマ野郎に言われたくないな！　さっさとＣＯＭＰの中にでも入ってカブソあたりをナンパしてるのがお似合いだ！」

「ぐぬぬぬぬ…………」



「ぐぬぬぬぬ………」
つばを掛け合いながらにらみ合う俺とヘイムダル。
どちらの拳が先に動いたか、それは憶えていない。

――XX区ニテ悪魔と人間の衝突ガ発生。死者は無シ　ミナサマよい一日ヲ！



Escape From Y.A

山手線内が封鎖されてから数日。

街のあらゆる場所を調べつくしてはみたものの、一向に出口は見つからない。

どこもかしこも自衛隊に阻まれ、突破はおろか、いまや近づくだけで銃を向けられてしまう。

それでも、主人公達は諦めずに脱出の方法を探していた。

通常の方法で抜けられないなら、悪魔を使えばいい。

例えば霊鳥たちなら、抱えて飛んでもらえるのではないか。

だが自衛隊装備のライフルを、人を抱えたまま避けられるとは思えない。

例えば龍胴絞めで足止めをしている間に逃げればいいのではないか。

だが龍王一匹でどれだけ足止めできるかは分からないし、そもそも突破には危険が伴う。

例えばブフにアギをぶつけて水蒸気爆発を起こし、そのドサ

クサで突破してしまえばいいのではないか。いや、それはただのテロだ。

様々な意見が出ては、それを打ち消すかのように別の意見が出る。

そんなことを繰り返していくうちに、皆の頭のなかが煮詰まってくる。

時には意見が対立していがみ合いそうになるところを何とか押さえながら、方策を練り続けた。

そして、その会議はいつしか別の方向へと向かいはじめていた。

「なあ、ところで〝瞬転の舞〟ってどんな仕組みなんだ？」

「それを言ったら〝夢幻の具足〟だってそうよね」

悪魔達は種族によって異なる能力を持つが、特に神獣と呼ばれる種族と、幻魔と呼ばれる種族は共に移動に関する能力を持っていた。

どちらも効果を受けている間は気づかないが、傍から見ればそれは瞬間移動といって差支えがない。

この能力を使えば、自衛隊の包囲網から抜けられるのではないか。

「でも、今の自衛隊は悪魔を見たら発砲してくるよね。それに悪魔使いにも。そんな状況で満足に悪魔を使えるとも思えないんだけど」

ケイスケが至極真っ当な意見を述べる。幾度となく悪魔での攻略を阻んできた、自

衛隊の銃という最大の問題を。

だが、それに対してミドリが解決策を示した。

「だったらさ、やり方を教わればいいんじゃないかな。だって、〝瞬転の舞〟って言うんだから踊りなんでしょ？」

その言葉に膝を打つ一同。

もしそれが可能であれば、解決策になるかもしれない。

「オレたちに出来るかはわからないけど、ちょっと聞いてみようか」

そう言って主人公がＣＯＭＰを操作し、神獣ハクタクを召喚する。

「主よ、いかがなされました。見たところ怪我があるようにも見えませんが」

「うん。ちょっとお願いしたいことあって」

「私にですか？　私にできることであれば構いませんが」

「ありがとう。早速で悪いんだけど、オレたちに〝瞬転の舞〟を教えてくれないかな」

予想もしていなかったのだろう。

ハクタクの動きがぴたりと止まる。

「舞を……ですか。ですが人間に出来るかどうかはわかりかねます」

「それでも構わないんだ。とにかく今は、すこしでもこの封鎖を乗り越えるための材

料が欲しい」
主人公の言葉に周りの仲間たちも頷(うなず)いた。その思いが通じたのか、ハクタクも真剣な眼差しになる。
「それほどまで仰るのであれば、応えないわけにも参りません。わかりました、ご教授させていただきます」
「ありがとう！」
かくして、即席のダンスレッスンが始まった。
「いいですか。まずは自らの尻尾を左右に……」
「出来ないよ！」

赤坂トンネル。
人々の間に密かに噂される封鎖外への脱出口。それがこの場所に隠されていた。だがもちろん政府がこの通路の存在を知らないはずがない。ここにも自衛隊員はしっかりと配備されていた。
「おい、誰か来たぞ」
歩哨に立っていた隊員の一人が、他の仲間に声をかける。すぐさま銃を構えて、近

づいてくる人影に声をかけた。
「止まれ！ この道は通行が禁止されている。速やかに引き返せ。これ以上近づくようなことがあれば作戦への妨害とみなす。妨害に対して我々は発砲が許可されている」
その言葉が届いたのか、人影の動きがぴたりと止まる。よく見ればそれは一人ではなく数人のようだった。
「どうしたの？」
その時、自衛隊側に一人の女性士官が現れた。近くにいた自衛官が手短に状況を説明する。
「はっ。不審な人物が数名こちらに向かっていたため、現在停止勧告を出したところであります、飯綱(いづな)一尉殿」
「不審な人物？」
「あちらであります」
イヅナが視線を向けたところで、空気が動く。
停止勧告に従っていたはずの人影が突然奇妙な動きを見せ始めた。
両腕を上下させるもの、回転しながら飛び跳ねるもの。
タップダンスのような複雑な動きを見せるもの。それはあたかもその場所で何かの

儀式が行われているかのようであった。

慌てたのは隊員たち。

目の前で起こる暗黒舞踏に、なにか得体の知れない恐怖を感じていた。そしてそれはすぐさま一つの結論へと結びつく。

「は、発砲しろっ！　奴らは悪魔だっ、間違いないっ！」

その言葉に他の隊員たちも正気を取り戻し、次々と引き金を引く。

あまりの急展開にイヅナも口を挟むことが出来ない。その間にも弾は次々と発射されていく。人影たちも次々と襲ってくる弾丸にはなす術もないのか、一目散に逃げ出していった。

（あら？　あれは……）

その時、イヅナの目には見覚えのあるヘッドホンの少年が映った気がした。

だがそれを確かめようと目を凝らしたときには、既にその姿は土煙の中へと消えていた。

「やっぱりダメだったじゃねえか！」

アツロウの叫び声が中空に溶ける。赤坂トンネル内でハクタクに教わった〝瞬転の

舞〟を踊ってはみたものの当然のように効果はなく、それどころか悪魔と勘違いされて発砲までされることとなった。

「死ぬかと思った……」

命の危機を感じたユズが全身で喘いでいる。

「やっぱりアレンジがいけなかったのかな。五人いるし、戦隊ヒーローっぽいと思ったんだけど」

「みんな動きがバラバラだったよね。同じ踊りを習ったはずなのに」

ミドリと主人公が踊りについて分析をする。

「ていうか、よく考えたらそもそも〝瞬転の舞〟ってボクらの位置を交換するだけだよね。誰かが向こうに行ってからじゃないと、意味がないよ」

ケイスケの言葉で、一同は作戦の失敗を悟った。

「じゃ、じゃあ〝夢幻の具足〟は？　具足って確か足につける鎧のことだよね。身に着けるものだったら借りられないかな」

ミドリが諦めず、先ほどあがっていたもう一つの意見を取り出す。

「確かに。目の前でいきなり踊られちゃ恐がられるかもしれないけど、身に着けるものならそんな変なマネしなくてもすむもんな」

先ほど撃たれたことを思い出してか、軽く身震いをしながらアツロウが賛同する。
「〝夢幻の具足〟なら、障害物なんかも越えられるからね。バリケードのところとか選べば、むしろ安全かもしれない」
ケイスケからも肯定的な意見が出たことで、全員のやる気がどんどんと戻ってきた。
「それじゃあ、呼び出して聞いてみようか」
主人公がまたもCOMPを取り出し、幻魔ハヌマーンを呼び出す。
「私になにか御用ですか、ご主人」
「単刀直入に言うよ。その〝具足〟を貸してくれないかな」
「何ですって？」
「オマエの着けてるそのすねあてを貸してくれって言ってるんだよ」
業を煮やしたアツロウが二人の会話に割って入る。だがハヌマーンは渋い顔のままで、なかなか渡そうとしない。
「そう言われましても。これは我々幻魔族の秘宝。それに人間に使いこなせるとも思えませぬ。いくらご主人の命とはいえ、そうやすやすと渡すわけには……」
「何か対価が必要だってことか」
「私は人間に近づきたいのです。そのような合体をさせていただけるのであれば、こちらはお譲り致しましょう」

「とは言ってもなあ……」
主人公が逆引き検索をかけるも、まさか人間と合体できるわけもないので、適当な悪魔が見つからない。
「とりあえず、その猿っぽいところがなくなればいいかな？」
「叶うのであれば」
そういったやり取りの後、COMPに戻ったハヌマーンを早速鬼女リリムと合体させる。
現れたのは、獣の皮を被った偉丈夫（いじょうぶ）、鬼神ベルセルクであった。
「オオオオレ、ヒトに近クなったか？　なったナ！　感謝すルぞ！　約束通リコレをヤル！」
そう言って、先ほどまでつけていた具足を手渡すと、意気揚々とCOMPに戻っていった。
「いいのかな……」
「ま、まあ本人が納得してるならいいんじゃないか」
ユズの質問を半ば流すように話題を変えるアツロウ。

「そんなことより、せっかく手に入ったんだ。早速試してみようぜ」
「それもそうだね。じゃあ早速着けてみるよ」
受け取った具足をすねの辺りからはめていく。
サイズの問題もあるかと思われたが、それは装着の途中に自動的にフィットするように縮んだことであっさり解決された。
両足に着けて、主人公の準備が整う。
「じゃあ、ちょっと走ってみるね」
「おう、がんばれよ」
「気をつけてね！」
「無茶はしちゃだめだよ」
「後でアタシにもやらせてね！」
四者四様の声援を受けて、主人公が走り出した。
その途端、体が軽くなったように感じ、周りの景色の流れが遅くなる。ちらりと後ろを向けば、四人ともまだ声援を送ったままの体勢で止まっている。
（なるほど、これは装着者を身軽にするだけじゃなくて、時の流れを遅くするものなんだな。装着者は普通に動いたつもりでも、周りにとっては数百分の一しか時間が流

れてないから、瞬間移動したように感じるんだ。これだったら、どこでも気付かない間にすり抜けられるかも！）
思いもかけないところで解決策を見つけた主人公は、急制動をかけるとすぐに気付いた事を伝えようと振り向いた。
「やったよみんな。これなら封鎖を突破で…………」
「…………っきゃーー!!」
瞬間、ユズの悲鳴が辺りに響いた。
それだけではない。
アツロウは主人公を指差したままアワアワとなにかを呟き、ミドリは目を丸くしたまま主人公を凝視している。
そんなミドリの目を後ろから覆い隠したケイスケが叫んだ。
「主人公君！　服！」
「へ？　服？」
言われて視線を向けた主人公はそのまま体が麻痺したかのように停止した。そこにはつい先ほどまで身に着けていたはずの衣服が燃え尽き、自らの体がそのままあらわにされていたのだ。

時の流れを操作するのではなく、本当に自らの体を加速したため、ついてこれなかった衣服が摩擦熱で燃え尽きたと気付いたのはこの時になってからだった。ご丁寧に具足に覆われた部分だけは服が残っていた。

「あ、あはは、ちょっとこれも問題があるみたいだね」

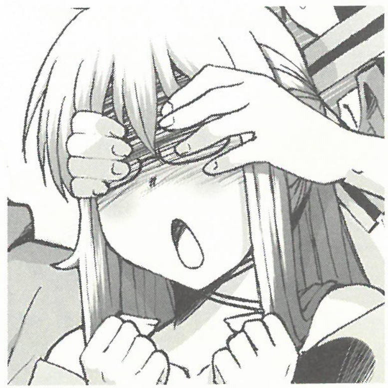
「いいから早く服を着てー!!」

叫び声と共に、ユズから次々と魔法が放たれる。その威力に吹き飛ばされながら主人公はただ一つのことだけを考えていた。

（ユズにやらせればよかったかな）

主人公達の脱出はまだ遠い。







俺は本庁所属の警察官。

名前は……そうだな、「池面」とでも呼んでくれ。何、ダサい？　だったら……めんどくさいから好きに呼べ！

「あの野郎……こんどあったらタダじゃおかねえ……」

先ほどまで殴り合いを演じていたヘイムダルの文句を呟きながら、顔を腫らした俺はぶらぶらと道を歩いていた。

「顔を殴るたあ、仮にもイケメンを名乗るものとして許せねえ行為だってのに……」

怒りが収まらないまま、腹いせに近くにあったゴミ箱を蹴り飛ばす。思わぬ快音にすこしだけ矛を収めると、オークションで競り落とした悪魔を合体させていく。

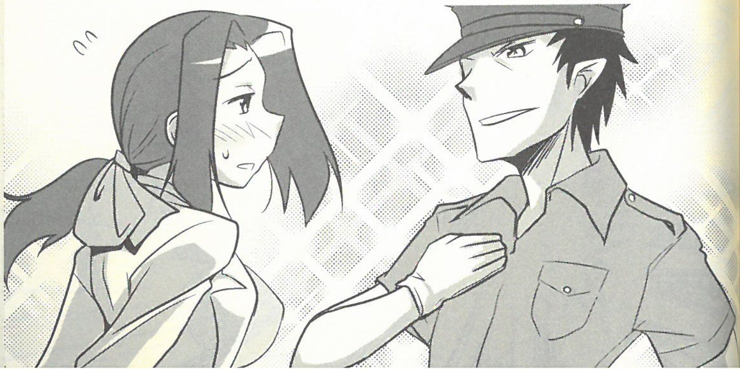
戦力を整えたところで一段落しようとすると、そう遠くない場所から女の悲鳴が聞こえてきた。

「ふっ。イケメンは休む暇もないかっ」

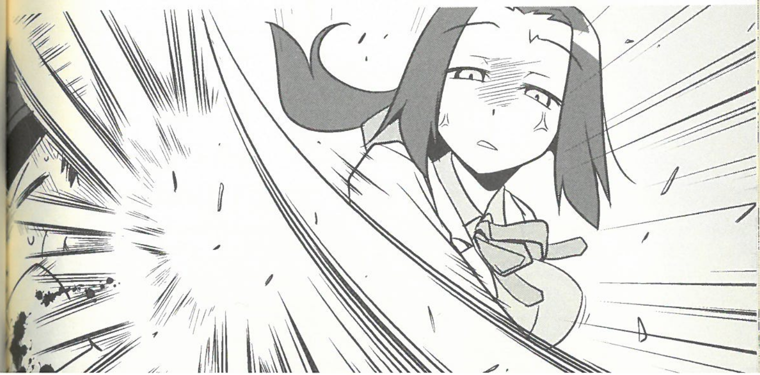
悲鳴が聞こえた方向へと走り出す。まもなく見えてきたのは、

白衣らしきものを着た女が変な黒マントを着た悪魔に追われている姿。
「クルースニクゥゥゥゥゥ！　貴様が死ねば俺様は自由だぁぁぁぁぁ!!」
「はあっ……はあっ……」
女の足は今にもつれて倒れそうなほどふらふらしている。しかも黒マントの呼び声を聞いてか、他の悪魔が次々と集まってきていた。
「そこのお嬢さん！　早くこっちに来るんだ！」
そう声をかけながら、注意を向けるべく黒マントに向けて発砲する。
「ぬぉお!?　なんだ貴様!!　俺様とクルースニクのラブの語らいを邪魔するのかあああぁぁ？」
銃声を察知されたようであっさりと弾丸が回避される。女性に当てないように発砲したからとはいえ、こうもやすやすと避けられるとそれはそれで腹が立つな。
駆けてきた女を背中に庇いながら、先ほど作ったばかりの悪魔を召喚する。
「黙れ変態野郎！　お前の相手はこの俺だ！」
「おうおうおう貴様も悪魔使い使われか！　お前の血は何味だぁ？」
「ふざけるなよ悪魔。イカれた格好しやがって」
「ヒャッハッハッハ！　黒マントは吸血鬼クドラクさまの証証あかしぃ！」

クドラクという名の悪魔と舌戦を繰り広げながら、チラリと後ろを見る。
走り続けていたからか、紅く上気した頬。白衣の下に隠された豊満な体。優しそうな顔立ちながら鋭く尖った視線。
俺のタイプにクリティカル。
一気にやる気を燃え上がらせた俺は、普段の五割増しの顔で話しかけた。
「お嬢さん安心してください。この悪魔は私が倒して差し上げましょう」
そう言って、先ほど召喚(よ)んだ悪魔に指示を出しながら俺は黒マントと対峙(たいじ)した。
「…………っ!?　いけない、クドラクは私が……」
「何、この程度の悪魔簡単に片付けてあげますよ」
言うが早いか、今度は至近距離で銃撃を叩き込む。先ほどは回避された攻撃も、この距離であれば避けられる心配



はない。俺の銃が踊るたびに悪魔の体が跳ね上がる。
「なんだぁ!? あれだけ大口叩いてその程度かぁ!?」
途切れることなく銃弾の雨を降らせる。召喚した悪魔からも炎やら竜巻やらが飛び、あっという間にボロ雑巾が出来上がった。だが、黒マントはそんな状態にもかかわらず負け惜しみしか言わない。
「ヒャッハッハ! 倒した倒した倒された!! クルースニク、次を待っていろよぅ!!」
なおも笑い続ける黒マントにオマケとばかりに弾丸を叩き込むと、その姿が霧となったかのように消えていった。
「五月蝿い奴だった。さあお嬢さん、もう大丈夫です。あなたを襲った悪魔は私が退治して差し上げましたよ」
感謝の抱擁、キス、あるいはその先……?
俺の頭の中はこれから起こるべき未来がどのようなもので有るべきか、正しい答えを予測しようとしていた。
だが……、



「愚か者!! あいつは私が倒さねば消滅させられんのだ!」
振り返った瞬間に飛んできた平手と罵声の言葉。そして頬に当たる強い衝撃。その時点で俺の脳は完全にフリーズした。

★ ★ ★

「勝手にでしゃばった上に面倒なことをしおって……」
クルースニクが取った作戦は、自分が囮になりつつ、戦いやすい場所まで誘導することだった。しかし突如現れたヒーロー気取りの警官に全ての準備が台無しにされてしまった。
(クルースニクさん。なにもここまでしなくてもよかったんじゃ……)
宿主であるマリがそんな意思を伝えてくる。途中までは上手くいっていた作戦だけにクルースニクの怒りは理解できる。だが、それでも、助けようとした人に手を出してしまったことに、マリは罪悪感を持っていた。
見れば警察官は頬を打たれ、倒れたまま微動だにしていない。
「そんなことより今はクドラクです。あいつが復活する前に羊膜の準備を整えなけれ

ば……」
（え、ええ……そうね）
宿主であるマリと意見の一致をみたクルースニクは、警官など眼中にないとばかりにその場を立ち去る。
後には、固まったままの警察官だけが残されていた。
――本日18:00　××にて警察官一名　精神錯乱　ミナサママ良い一日[redacted]！



休暇の始まり

夏の空の青さが好きだ。ぬけるような青い空と、そこに映える真っ白な雲。
今、東京の空は、赤黒く濁っている。
「……怖いよ。私たちどうなっちゃうのかな」
ユズが怯えている。
「どってことないさ。いつも通り、いつも通り」
アツロウは強がっている。
血の色の陽光が、二人の顔に影を落としていた。
「そんなこと言っても……あと二日なのよ、二日！」
「わかってるよ。だから早く悪魔を制御する方法を探さないと」
「そんなこと、二日でできるの？」
「ほかに仕方ないだろう。逃げようったって自衛隊が外を固めてるんだ」
にらみあう二人の視線は、その言葉ほどには激しくない。疲れだけがこもっている。
「どこか逃げる道があるかもしれないじゃない」

「あるわけないだろ」
「なんで、そんなことが……」
怒りではなく、疲れから、悪意が、少しずつむきだしになってゆく。
「ふぁぁぁぁぁ」
ヘッドフォンの少年は、大きなあくびをした。
「あ、ごめん。昨日、あんまり眠れなくて」
悪びれない笑顔に、ユズとアツロウも我に返る。
「二人は眠れてる？」
「あ、あんまりかな。野宿はだいぶ慣れたけど、疲れがとれないみたい……」
「目をつぶるとよけいなこと考えちゃうんだよな。夢見もわりーし」
「そっか。それはよくないよね」
少年は、伸びをする。
「よくないっていってもなぁ……どうせあと二日だし。もうちょっと頑張るさ」
「そうだね……」
言葉と裏腹に二人の顔はさえない。
よくない兆候だ。

少年は、顔に出さずに思う。
「じゃ、今日は休みにしよっか？」
「ちょ、おまえ、休みって何考えてんだよ！」
「そ、そうよ。あと二日しかないのに！」
「こういう時だから、あせってもしかたないよ。体調を整えるのも準備のうちだよ？」
「受験前みたいなこと言うな」
アツロウがちょっと笑った。
「夕方まで自由行動。なんか楽しい話でも持ってきてよ」
「楽しいこと……」
ユズは、口の中で、その響きを転がす。
「休みかぁ。うーん、そう言われてもなぁ」
アツロウは首をひねる。
「キミは何するの？」
「そりゃもちろん昼寝するよ。いい夢みたら、教えるよ」
無邪気な笑顔に二人は毒気を抜かれ、顔を見合わせる。

歩み去る二人を見送ってから、ヘッドフォンの少年は空を見上げた。

赤い色の空。

そんなに嫌わなくてもいいのに、と、少年は思う。

空の色に罪はない。夕焼けや朝焼けが綺麗なら、この空もきっと綺麗だ。

大きく伸びをしてから、気合を入れて眠気を振り払う。

こうして三人の休暇が始まった。



ユズの休暇

1

割れたショーウィンドウが空の赤さを映していた。

悪魔が、悪魔使いが、ただの人間が、街を傷つけている。

傷ついた街を直すものはなく、どろりとした血が流れ続けている。

時間が止まっている。

そう、ユズは思う。

どれだけ走ってもどこへもいけない悪夢のように。

休暇を楽しむ気にはなれなかった。

右手にお気に入りのバッグ、左手にお弁当を詰めたバスケットを持って街を歩いても、あたりの風景は気が滅入るものばかりだ。

ああ、早く、ここから出たい。そう思う。

角を曲がると、見慣れた空のコンテナが転がっていた。

自衛隊による食料の空中投下の跡だ。

パラシュートは引きむしられ、強化プラスチックのコンテナは横倒しになり変形し、一部は引き裂かれていた。

おそらくは悪魔使いが関わった壮絶な食料の奪い合いがあったのだろう。

コンテナの陰に動く影を見つけ、ユズは反射的にＣＯＭＰを取り出した。

「誰？」

足をひきずりながら現れた小さな影。

小鬼でも妖精でもない。人間の男の子だ。

ばったりと、足を押さえてうずくまった。

「ちょっと、ボク、大丈夫？」

食料の奪い合いの犠牲者か。こんな子供まで。

ユズは急いで駆け寄った。外傷は見えなかったが、内蔵や骨を痛めてるのかもしれない。

倒れた子供を助け起こそうとしたその時、少年が、するりとユズのバスケットを奪い、突き倒す。そして、そのまま路地の奥へ駈けだした！

「……え？」



一瞬、なにが起きたのかわからなかった。
後ろを振り返る。誰もいない。
何かに怯えて逃げ出したというわけではない。
バスケットを盗まれたということが、ゆっくり頭に染み通る。
「じょ、冗談じゃないわよ！」
ユズは走り出す。
いつもだったら、あきらめていたかもしれない。
けれど、今日はユズの休日なのだ。時間はたっぷりある。それに今となっては、お弁当は十分に貴重品だ。
角を三つ曲がったところで、ユズは、ついにその少年の腕を掴んだ。
少年の顔をまじまじと見る。小学校高学年くらいだろうか。口を結んで目をそらしている。
「……返す」
ふてくされた声で、バスケットを投げてよこした。
少年の目が、返したバスケットに向いている。
「おなか、空いてるの？」

ユズは声をかける。聞くまでもなかった。
少年は顔をそらしたが、目が裏切っていた。
「一緒に来てくれたら、すこしごちそうするよ？」
バスケットを開けてサンドイッチを見せる。少年の喉が動く。
「なんだよ、なさけかけるのかよ」
口を尖（とが）らす少年。
「ね、人のものを盗るのはいいこと、悪いこと？」
「……悪いこと」
「じゃぁ、罰として今日は私につきあいなさい」
「……罰じゃしょうがない」
どこまでも大人びた口をきく少年に、ユズはちょっとほほえんだ。頭をなでてあげたいけど、なでると怒るだろうな。

放棄されたオープンカフェ。
「ここにしよっか」
ユズは傘のついた席に座る。紙皿を取り出して、サンドイッチを並べてゆく。

「ボク、好き嫌いある？」
「ない！」
少年は、手を伸ばしてサンドイッチを掴む。
ベーコンとトマトの特製サンドイッチだ。残念ながらトマトは缶詰だが、保存食のカンパンに比べれば雲泥の差がある。
少年は、サンドイッチを口に運ぼうとして逡巡（しゅんじゅん）する。
「……これ、持って帰ってもいいか？」
「いいけど……どうするの？」
少年が下を向いて黙り込む。ユズは何か間違ったことを言ったかと悩んだ。
「おまえ、いいやつだから、教えてやる」

2

少年に引きずられるようにして住宅街に入ってゆく。
少年が足を止めたのは、一軒の家の前だった。ノブをひねると、ドアが開いた。
「ただいまー」

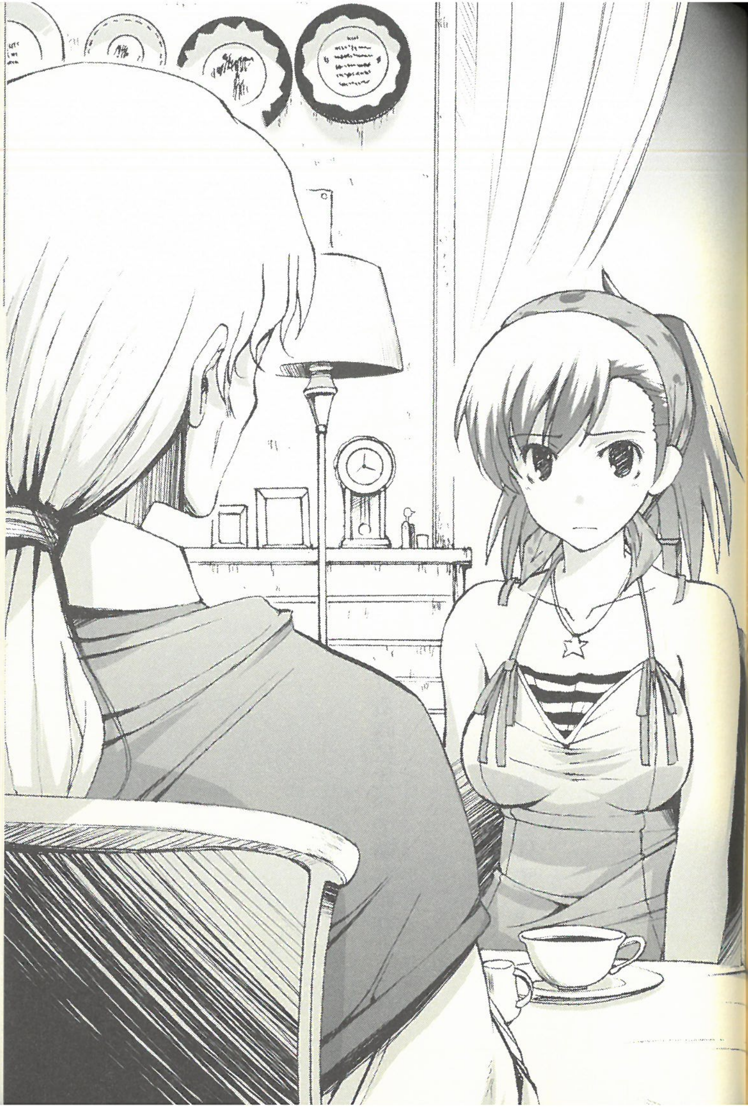
「あら、お帰りなさい」
奥から明るい声が聞こえた。
「お、お邪魔します。あ、ユズって言います初めまして」
ユズは靴を脱いで家にあがる。
「あら、お客様？」
少年の後についてユズは寝室に入った。
大きなベッドの中で、小さな老婦人が身を起こした。少年がかけよって、クッションを直す。
「いらっしゃいませ。散らかっててごめんなさいね」
年の頃はいくつだろう。七十過ぎか。真っ白な髪のお婆さんだ。
「久しぶりにお茶を入れましょうかね」
老婦人はそう言ってにっこりと笑った。
暖かな紅茶の香りに包まれて、ユズは、ほうっとため息をついた。久しぶりに人心地がついた気がする。
紅茶ならアツロウたちとも、隠れ家で飲んだ。携帯用コンロでお湯を沸かすのも同

じだ。
　何が違うのだろう。
　きちんとしたテーブルに座り、テーブルクロスとティーセットでいただいていることか。
　いや違う。
　それだけじゃない。
　私たちはいつも緊張していた。
　お茶を飲むことさえ、次の戦闘に備えるためのものだった。
　けれど、ここで今、老婦人とお茶を飲んでいると、心からくつろげる。
「婆ちゃん、水は足りてるか？　足りなかったら持ってくるからな」
「ええ、ありがとう」
「あ、あの、お婆さんは……その、毎日不安じゃないですか？」
「そりゃ私も最初はびっくりしましたけどねぇ」
　老婦人はティーカップを置いてほほえんだ。
「急に停電でしょ。電話も通じなくなって、いつも来てくださったお手伝いさんも来られなくなって、私一人じゃ買い出しにもいけませんから」

　淡々と述べる老婦人。
　ユズは目を伏せる。
「まぁでも、この年ですしね。いつお迎えが来てもいいと思いましたら、気が楽になりましてね」
「だめだよ、婆ちゃん。死んだら絶対だめだからな」
　少年が強い口調で言う。
「サンドイッチ、もっと食べないと」
「あらあら。私はおばあちゃんだから、そんなに入りませんよ」
　それでも老婦人は言われるままに、ユズのサンドイッチをつまむ。
「あら、おいしいわね。あなたが作られたの？」
「は、はい！」
「最近の若い人はすごいわねぇ。私の若い頃は、年をとった人の知恵は大切にしろと言われて育ちましたけど、いざ自分が年とってみると、そんな人様にお聞かせできるような知恵なんて、とてもとても……」
「そ、そんなことないですよ」
「ありますったら」

いたずらっぽい笑い。
「でも、ただ一つだけあるとしたら、落ち着きかしら。もうね、なるものはなる。ならないものはならない。外は停電で、その上、悪魔とかまで出ているんでしょ？」
「はい」
「大変ですわよねぇ。そりゃま、私みたいな年寄りの面倒まで手が回らなくても、当たり前ですよ」
「そんなことない」
少年は、にらむように老婦人を、ユズを見た。
あぁこの子は、たった一人で戦っているんだ。
神と悪魔を全部あわせたよりも強い敵。この世の不条理と。
「ありがとうさんね」
「……水、汲んでくる」
少年は席を立った。そむけた顔が赤かったのがほほえましかった。
「お孫さんですか？」
「いいえ、あの子は……なんて言ったらいいのかしら……迷子ですよ」

「え、迷子？」
「ある日、この家に来てくれたんですよ。親御さんを亡くされたらしくてねぇ」
「そうだったんですか……」
「それ以来、この私の面倒を見てくれてねぇ。本当にいい子ですよ」
「ほんとうに、いい子ですね」
「私なんか助けられてばっかりで……」
「そんなことは、ないと思います」
ユズの胸の中で熱いものが渦巻いた。ひとつずつ言葉にかえて舌にのせる。
「あ、あの、私が、あのくらいの歳で、親を亡くしたら……打ちのめされて何もできないと思います。あの子が元気なのは、お婆さんがいるからです」
「そうなのかしらね」
「はい。見てればわかりますよ」
「ならいいねぇ。こんな私でも、役に立ってるなら、嬉しいよ」
けれどねぇ、と、老婦人は声を沈ませる。
「封鎖が続けば、こんな暮らしもいつまでも続かないでしょう？　そうなる前に、なんとかあの子だけでも逃がしたいんだけどねぇ」



「はい……」
「会ったばかりの人にお願いするのもなんですけれど、もしユズさんに心当たりがあったら……」
ユズは言葉に詰まった。
顔が熱くなる。
さっきまでの自分は、自分一人逃げることしか考えていなかった。逃げて忘れてしまおうと思っていた。
目が覚めれば消えてなくなる夢のように。
でも今日出会った二人は、夢ではない。断じて夢ではない。二人のことを忘れることはできない。消えてなくなれるとも思えない。
「逃げる方法は、わかりませんけれど……」
「それはそうよね。無理言ってごめんなさい」
「封鎖を解くために頑張ってる人たちがいます。だから、あの、もうすぐなんとかなると思います」
なんとかなる。いや、なんとかする。
「もう少しだけ待ってください」

ユズは頭を下げた。ほかにすることが思いつかなかった。
「頑張ってね」
老婦人の言葉は、本当に優しかった。

3

「ただいまー」
「あ、ユズ、お帰り」
ヘッドフォンの少年は顔をあげてユズを見た。出かける時に比べて晴れ晴れとした顔をしている。
「いいことあったかい？」
「うん。綺麗なお婆さんにあって、おいしい紅茶をごちそうしてもらっちゃった」
おみやげにもらってきちゃった、と、ユズはリボンのついた紙袋を見せる。
「アツロウ帰ってきたら、お茶にしよ？」
「そうだね」
ヘッドフォンの少年はうなずく。

何が起きたのかはわからない。言葉にすれば紅茶一杯。でも、きっとユズの中では、もっと大きなことがあったのだろう。
休暇の意味はあったようだ。
「また明日から頑張ろうね」
「そうだね」
ヘッドフォンの少年は満足げに答えた。



アツロウの休暇

1

「休みって言われてもなぁ」

アツロウは歩き出す。

ゲームしてネット見て、プログラムして。

そんないつもの休日の過ごし方は、停電下の東京ではできないことばかりだ。

友人を呼ぼうにも、携帯は圏外で使えない。

どうしたものやらと思っている間に、自然と足は秋葉原(あきはばら)に向いていた。

「……荒れたなぁ。でもマシなほうか」

秋葉原の広い街路には、乗り捨てられた車が散らばっている。

かつての活気はどこにもない。

どこでも最初に荒らされるのは、食料店やコンビニなどの生



活必需品のあるところだ。
ガラスが割られ、シャッターが破られ、そこを中心にヤクザやチーマーが集まって縄張り争いがはじまる。
浮き世離れしたアキバは、ぱっと見、あまりそうした店が目につかないので、あまり荒れていないように見える。だがもちろん、通りを探していけば悲劇の痕跡はいくらでもある。
割れたガラスに血の跡。
ぞんざいに新聞紙をかぶせてある死体は、野良猫にしては大きすぎる。アツロウは死体に黙礼して、帽子を目深にかぶった。

少し前のケイスケを思い出す。
あいつだったらこれをみて怒るんだろうな、と思う。どうして同じ人間が、こんなことをできるのかと。そうして、あいつは罪を犯す人の一人一人を裁こうとした。
自分は、どうしてもそこまで熱血になれない。なぜならば、
「……バグだよな」
口に出してつぶやいてみる。

人と人が平和に暮らしていくためのシステムがある。大人が働いてお金をもらって子供を育てて、困った時に警察や病院や消防署がある、そんなシステムだ。
平和に暮らすためのシステムが壊されたのだから、不都合が生じるのは当たり前だ。ＣＯＭＰがあって仲間がいなければ、アツロウだってそこで死んでたかもしれない。あるいは殺す側だったかも。
今起きているのは、アツロウからすればシステムのエラー、すなわちバグである。であるなら、そのシステムを直すのが合理的な考えだ。どうしても、そう考えてしまう。

……鍵はこいつだ。
懐のＣＯＭＰに触る。
悪魔召喚プログラム。
これがシステムのバグにして特異点だ。
誰もが……日本政府も翔門会も、自分たちを含めた悪魔使いも、こいつを扱いかねている。
扱いかねて封鎖がされ、戦闘が起きて、殺し合いになっている。

けれど、アツロウはプログラム自体を否定する気にはなれなかった。

新しい技術が生まれる時に、軋轢（あつれき）はつきものだ。だからといって過去に戻ることはできない。

ナオヤが消えて、悪魔使いとＣＯＭＰの全部を消し去っても、誰かがまた召喚プログラムを作ることだろう。

システムを元に戻すのではなく、システムを改善すること。

電気さえあれば、こいつを解析するんだが……。

こつん、と、後ろ頭を何かにこづかれた。

——敵。

一挙動で振り返り、ＣＯＭＰを取り出す。左右に視線を振って敵を探す一方、指はＣＯＭＰを操作して召喚プログラムのメニューを起動。今日は単独だからパーティ構成が変わる。直接攻撃を自分として、全体攻撃としてベルセルクを、回復としてヘカーテを、あとは敵との相性で……。

一瞬で、思考を戦闘モードに切り替え、構えをとって、索敵する。

「ん……紙飛行機？」

アツロウの目に入ったのは、厚紙を折って作った何の変哲もない紙飛行機だった。

ぽとり、と、紙飛行機が地面に落ちる。

緊張が去って一息つくと同時に、アツロウは、顔を覆った。

「うわちゃぁ」

やはり、疲れている。ただの紙飛行機に思い切り反応して、構えまでとってしまった。誰かに見られなくてよかった。

「ん、待てよ？」

誰もいないなら、この紙飛行機はどこから飛んできたのか？

紙飛行機を拾い上げ、開くと、果たしてそこには文字が書いてあった。

「お暇だったら遊びに来ませんか？」

そして、びっしりと印刷されたアルファベットと数字。

「お、暗号？」

わくわくするものを感じて、アツロウは紙と鉛筆を取り出す。これが暗号なら確かにアツロウの休日にふさわしい。

「さぁてっと……解析開始！」

そして一時間後。

「こいつは……」

アツロウは舌なめずりしていた。

暗号の解析自体はそれほど難しくなかった。コンピュータがまともに使えれば十分で終わっただろう。

簡単だった理由は、見覚えがあったからだ。

暗号化のロジックやキーワードの選び方が、ナオヤにもらった悪魔召喚プログラムのプロテクトと同じだった。

といっても、紙飛行機の作者がナオヤ本人というわけではない。ナオヤなら同じプロテクトは二度使わない。

「つまり、こいつを作ったやつは、ＣＯＭＰの召喚プログラムを、ある程度、自力で解析したってことだな」

面白くなってきた。

アツロウの解読した内容は、そっけないものだった。

35.69783E139.77536N

どうみても緯度と経度だろう。

「どうして番地にしとかないかな。ウェブマップとか使えないんだぞ、こっちは」

文句を言いながらも、アツロウは見当をつけて歩き始める。

「ここだな」

問題の地点には、すぐついた。

建物の入り口には、無造作に数台の乗用車が立てかけられ、侵入を拒むバリケードとなっていた。

クレーンもなしにやってのけたとすると、明らかに悪魔使いの仕業だ。

謎の相手が選んだ住居は、どうやらこの大型書店のようだ。

さて、どうやって入るか。

アツロウは紙飛行機を思い出す。謎の相手はどこから紙飛行機を飛ばしたか？

むろん、屋上からだろう。

「バイブ・カハ！」

現れた黒い鳥の足に捕まり、アツロウは空に駆けあがった。

2

「お邪魔しますっと」
屋上の入り口から下りると、アツロウは、ぶるりと震えた。
この涼しい空気は……冷房？
この相手は停電下の東京で電気を使えるらしい。
アツロウは慎重に歩を進める。暗号が面白くて一人で来てみたが、相手に敵意がないという保証はない。
「やぁ、いらっしゃい」
アツロウを迎えたのは、人なつっこい笑みを浮かべた長髪の男だ。
「外は大変でしょ。冷たいものでも飲む？」
「あるの!?」
考えるより早く言葉が出た。
「コーラが冷えてるよ」
ああ、この男とは気が合いそうだ。
「ありがとうってか、オレはアツロウ」
「あ、名前は伏せさせてもらうよ。こんな状況だ、適当な距離感があった方がお互いやりやすいはずだよ。でもまぁ、来てくれて嬉しいよ。退屈だったんだ」

男はくるりと背中を見せて、奥へ進む。
アツロウは、一つ咳払いをした。男はよさそうなやつに思えたが、確かめることは確かめなければならない。
「で、アンタ、何者だい？　こんなところで何してるの？」
「争いごとの嫌いな、ただのハッカーさ。裏とか気にしてるなら、特にそういうのはないよ」
「不用心じゃねぇ？　もしオレがさ、襲いかかってきたらどうする？」
そう言いながら、アツロウはＣＯＭＰに触れた指を意識する。
もし、こいつが今襲いかかってきたら。懐から武器を抜いて、悪魔を召還する前にＣＯＭＰを押さえられたら。
そうしたらオレはどうする？
油断なく見守るアツロウに対し、男は警戒心のかけらも見せずに肩をすくめた。
「あの暗号を解いてくるような人は、遊び心があると思ったのさ。違ったらまぁ、仕方ないね」
アツロウは、うなずいた。
慎重に身を守るよりも、おおざっぱに人の善意を信じるタイプ。頭はいいがお人好

し。要するに、面倒なことには興味がないタイプだ。同じプログラマーとして、気持ちはよくわかった。
「ありがとさん。一応、聞いておきたくてね」
「いいって。外は大変なんだろ？　まぁ座りなよ。あ、椅子が一個しかないな」
男の部屋はアツロウにとっての天国だった。
大きな机。
ずらりと並んだ液晶ディスプレイとキーボード。
複雑怪奇な配線で絡み合った、コンピュータとハードディスクの群、群、群……。
部屋の片隅の冷蔵庫から、缶コーラを取り出して、アツロウによこす。
「ようこそ、我が家へ。かんぱーい」
「どういたしまして、かんぱーい」
コーラ缶の冷たさに、アツロウは興奮した。
缶を開け、ぐびぐびと飲み干す。
冷たい刺激が喉の奥を洗い、胃の中へ落ちてゆく。
ああ、忘れていたこの感触！
「うんめぇーーー」

「そりゃよかった」
二人は同時にゲップをした。
顔を見合わせて笑う。
「やっぱコーラだよな」
コーラは徹夜の友。
プログラマーのアツロウにとっては魂にも等しい。
「さて、アツロウ君。あの暗号を解読できたってことは……君、悪魔召還プログラムの関係者？」
「えーと一応、知り合いかな。でも詳しいことは全然聞いてない」
「そっか。いやさ、悪魔召喚プログラムを解析してるとこだけど、一人じゃどうしても壁があってね」
「うっわー。ちょっと貸して」
男がキーボードに触れると、無数のディスプレイに文字が踊った。
アツロウは、ほとんど奪うようにキーボードの一つを取る。
解析されたソースコード。見覚えがあるものもないものもある。
キーボードを叩きながらソースコードとメモリを展開。それが二人の会話となる。

「このオブジェクトの構造が……」
「そこの参照は非同期でこっちからだね……」
二人はデータで会話する。口から漏れる断片的な言葉は、その補足に過ぎない。
アツロウの目の前で、ナオヤのプログラムが露わになってゆく。
見覚えのある箇所にさしかかる。
「ここ、ここの処理がどうしてもわからなくて……」
「そこはね、アブラメリン行列を七重のラプラシアンで展開している」
「アブラメリン？」
「つまりさ。ＣＯＭＰの回路に波動方程式を適用して確率演算を行う。それを三次元に展開すると、こういう形になるわけだ」
アツロウのスクリーンに、幾何学模様が浮かび上がる。
回路内を巡る電子の軌跡によって作られる紋様。
「それがこれっていうわけ」
男は足下から、古びた本を取りだしてページをひらいた。木版画で描かれた魔法陣は、確かにディスプレイに広がったものにそっくりだ。
「ふえー」

「代理召喚サーバに問い合わせる真名（まな）は、テトラグラムマトンとカバラ変換を公開鍵にしてる、ってとこまではわかったんだが、その先がね」
男の弁舌が加速する。
無数のディスプレイでデータが連動してスクロール。
ちっぽけな０と１が綯（な）いあわされ、論理空間にオブジェクトを刻む。
オブジェクトは歌を歌い、同期して合唱となる。
莫大な計算処理が、この世のものならざるなにかを描き出す。
演算が空間を聖別（せいべつ）する。
演算は演算を呼び、莫大な情報量が時間をねじ曲げ空間を閉鎖してゆく。
詠唱。
電子の共鳴。
切断。
論理の刃。
接続。
ＡＮＤとＯＲの狭間。
この世にありえざるものを導き出すために、この世ならざる空間が、仮想的に展開



される。
目が離せない。
目の前に広がるデータの流れ。
そしてそれが脳内に作りだす巨大なビジョンに、アツロウは溺れかけた。
「ちょ、ストップ、ストップ、ストップ」
口に出して言う。
「ん、あぁ、ごめん」
画面が止まる。アツロウは、深呼吸した。冷や汗をかいているのは久々に触れる冷房のせいではない。
「すっげぇなぁ」
「全くだね。作者には是非一度会ってみたいよ」
「いや、四、五日で解析するほうもすごいっすよ」
「……まぁ肝心なところは全然解析できてないからね」
「肝心なところって？」
「全悪魔の強制制御とか、チートしてレベルアップとかそういうやつさ。そういうのは、どうやら端末からでは無理みたいだね。だから僕の解析は趣味みたいなもんだ」

　アツロウは、しばらく考える。ユズの顔、アイツの顔を思い浮かべる。この人となら一緒に戦えるだろう。
「あのさ……オレたちのパーティに来ねぇ？」
「君たちの？」
「あぁ。ほら、封鎖も悪魔も何とかしたくて戦ってるんだけどさ、結構いいとこまで来てるんだ。あとはアンタの知識があれば……」
「荒事は苦手なんでね……」
「そんなこと言わないでさぁ」
　うーん、と、男は苦笑した。
「封鎖の最初の日にね、僕は偶然、ＣＯＭＰを手に入れた。運良く悪魔を倒せて、そして、すぐにこの場所と非常電源を確保したんだ。おかげで外の混乱には巻き込まれずに済んで、研究三昧できたわけだけどね」
「すっげ。オレたちなんか最初の日はあわあわしてるだけだったよ」
「いや、そういう話じゃなくてね。最初の日からずっと一人でここにいたってこと」
　男がＣＯＭＰを開く。
「これが僕のステータスだ」

「どれどれ。ピクシーにコボルトにオーガーって、あぁ……」
　初日から戦っていないのであれば、レベルがあがるわけもない。
「これじゃどこいっても足手まといになっちゃうからね」
「無理言ってスイマセン」
「いいってことさ。コーラ、まだ飲む？　ＤＶＤもあるよ」
　アツロウは、しばらく厄介になった。
　男にプログラムを教わり、コーラとピザを食べながらＤＶＤを見て、くだらない冗談を言い合った。
　時間はあっという間に過ぎた。
「うげ、こんな時間だ。もう帰らないと」
　時計を見てアツロウはうなった。
「いやー楽しかったよ」
　長髪の男はほほえんだ。
　また会おう、とは言えなかった。
　あと二日で世界が終わる。終わらないにせよ、このままの生活は続かない。そのこ

とを二人とも分かっていた。
「僕に手伝えることがあったらいつでも連絡してくれ」
「そうします」
　アツロウは頭を下げた。

3

　帰り道。
　アツロウは、ビルを振り返る。
　あの最上階、地上から隔絶したところにあの人がいる。下界から隔絶した塔に住まう賢者のようだ。
　皮肉なものだ。
　卓越した知性を持った男は、けれど、その知性のために孤立し、塔から出られないでいる。一方のアツロウは、地べたを彷徨(さまよ)い歩き、その結果、世界の命運と戦う力を得た。
　システムを改善することで世界を根本から救う。男がそう考えたことは間違いでは

ないはずだ。
　では、何が違ったのだろう。
「アツロウ、お帰り」
「あ、お帰りー」
　おいしそうな紅茶の匂い。
「お、いい匂い。オレの分、ある？」
「待ってね。今、沸かすから」
「あ、そだ。オレもお土産」
　貰ったチョコバーを取り出す。
「あ、いいわね。紅茶に合うかもね。一緒に食べよ」
「で、アツロウはどうだったのかな？」
　ヘッドフォンの少年がアツロウのほうを向く。
「あぁ、いい休暇だったよ」
「そうみたいだね」
「なんかさ……その、人間、頭いいだけじゃだめなのかもな」

「そりゃそうよ。よかったじゃない？」
「何が？」
「だって頭いい人がいて終わりなら、アツロウみたいな肉体派の出番ないじゃん？」
「あ？　オレは肉体派じゃないっつーの！」
いつもの軽口。いつものじゃれ合い。
アツロウは、ようやく気付く。
共にいて、共に考え、支え合う友。
これが、男に無かったものなのだろう。
東京が封鎖された時、この三人がちょうど一緒だったのは、偶然に過ぎない。
その奇跡のような偶然を、一人になってようやく思い出すことができた。
「ありがとな、ソデコ」
「なによ、それ？」
「んーいや、コーラもいいけど、紅茶もいいよなってね」



カイドーの休暇

1

ステップしてボディにフック。
男の腹筋にカイドーの拳がめり込む。
――拳の感触。柔らかに沈み込む。鍛えた体じゃない。ただの雑魚。
さらにステップ。
後ろから組み付こうとする相手をいなし、背中に肘打ち。
――いつもの喧嘩。カイドーをなめてかかったチンピラ。仲魔を呼ぶまでもない。
三人目。
おびえた様子でＣＯＭＰを取り出す。
「いいのか？」
そう言って自分のＣＯＭＰに触れる。
相手は素手だった。
だからカイドーも手加減している。骨も折ってないし、顔面

もねらっていない。
だが敵が悪魔を使うのであれば遠慮する必要もない。
「糞っ」
男が背を向けて走り出す。
カイドーに倒された二人も起きあがって後を追う。
「シケた喧嘩だ……」
カイドーは、そう言ってチンピラたちのことを忘れた。
「助けてくれて、ありがとうございます」
幼い声に振り向く。
配給食料を大事そうに抱えた少年が怯えた目でカイドーを見ていた。
「ん？」
首をひねると、少年が気の毒なほど、ひるんだ。
あぁそういえば。ようやく喧嘩の理由を思い出す。
いい年したチンピラどもが、ガキの食料を狙ってたのだ。クズらしい行い（おこな）とは思ったが、それだけなら通り過ぎたかもしれない。

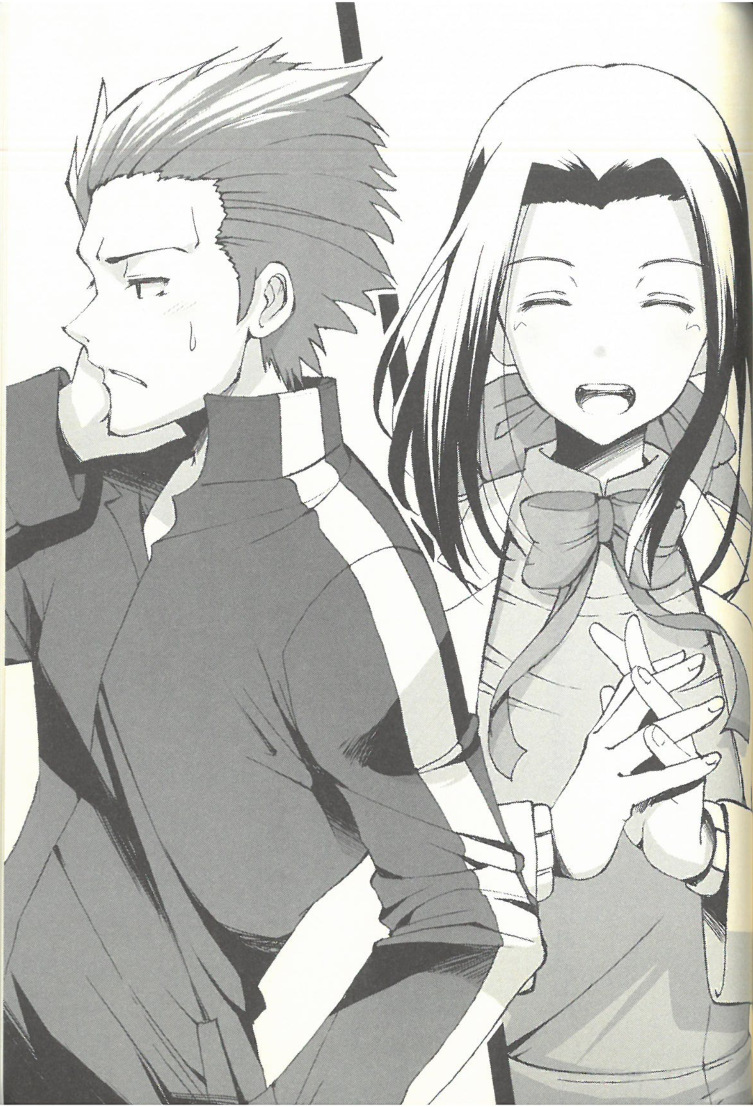
その時、チンピラの一人が、こっちをにらんだ。
「んだ、文句あんのか？」
あるかないかと言われれば無論ある。
「さっさと行け」
チンピラの一人が肩をこづく。カイドーは、にやりと笑って拳を握る。
「げっ。こいつカイドーだ」
一人が叫んだ時はもう遅く、そのまま乱闘になったという次第。
「あー、気にすんな。テメェを助けたんじゃねぇよ」
「え？」
「俺は俺のムカついたやつを殴っただけだ」
少年はぺこりと頭を下げる。
「強いんですね、カイドーさん」
「んあ？」
名乗った覚えはなかったが。
「さっきのチンピラさんが言ってました」

「よく聞いてんな。坊主」
少年の目にきらきらしたものを見て、カイドーは顔をしかめた。
「じゃぁ坊主。こんなとこでぼーっとしてねぇで、とっとと帰りな」
冷たく言い捨てる。懐かれても困る。
少年は、しゅんとうなだれて、それから、くたくたと崩れ落ちた。
「お、おい？」
さすがのカイドーもあわてて駆け寄る。
「ご、ごめ……」
顔をあげてあやまろうとした少年の言葉は、咳（せき）に遮（さえぎ）られた。額に触れれば燃えるような熱さだ。
「糞ったれ……」
カイドーは偽善が嫌いだ。
弱い者が死ぬのは当然だとも思っている。だが、さすがにこれは後味が悪い。結局道ばたに捨てていくことはできなかった。

2

病院の入り口にはバリケードがしかれていた。そのバリケードの前に、屈強な看護士が白衣で立っている。
「何の用だ？」
「あん？」
素っ気ない声に、反射的に首根っこをつかみそうになって思い直す。
「タダ飯食いに来たんならとっとと帰りな」
んだとこらぁという言葉を呑み込んで。
「俺じゃねぇよ、このガキだ。咳してぶっ倒れて熱出してた」
「ああっ！　ど、どこのどなたかわかりませんが、ありがとう」
看護士に深々と頭を下げられてカイドーはとまどう。
「いいってことよ」
「ささ、入って、入って」
断る間もなく、腕をつかまれて中に入れられる。
一歩入った受付は、戦場のようだった。
空きスペースには布団が並び、殺気だった看護士たちが、人の背丈より高く洗濯物

を積んだカートを運んで右往左往している。
「あら、タダシ君」
「マリ姉」
カイドーの幼なじみのマリは、小学校の養護教諭、つまり保健室の先生だ。どういったわけか、今はこの病院にいる。カイドーはそのことを覚えていたので、ここに来るに至ったのだ。
「病院てな、思ったより荒っぽいところだな」
「それはもう。電気なしで患者さんのお世話するだけで大変なのに、連日、けが人とお腹空かせた人が押し寄せてくるんですもの」
「……なるほどな。門番がゴツいわけだ」
カイドーは納得する。
「今日はどうしたの？　もしかして怪我？」
「いんや。ガキを拾ったんでな」
「あら、タダシ君だったの！　ありがとう」
「な、なんでもねぇよ」
笑顔がまぶしくて、つっけんどんな返事になる。



「……よかったら、少し、あの子を見舞っていってくれない？」
「見舞い？　まぁいいけどよ」
ついうなずいてから、カイドーは軽い自己嫌悪に陥った。
俺は一体何やってるんだ。

「よう、目は覚めたか？」
「カイドーさん！」
「いい部屋もらってんな」
カイドーは病室を見回す。少年の部屋は個室だった。
「何が不満で家出なんざしたんだ？」
「……ぼく、いなくなったほうがいいんです」
澄んだ瞳に迷いはなく、カイドーは眉をひそめた。
「んだとぉ？」
ヤクザもびびるカイドーのガンに、少年は、目をそらさなかった。
「いろいろ考えたんです。でも、ほかに方法がなくて」
「方法だぁ？」

「薬が足りないんです」
もっともな話だった。
大病院がどれだけ薬を使うかは知らないが、封鎖された東京で輸送が途切れれば、そりゃ無くなりもするだろう。
「ひょっとして、テメェが消えた分、薬が浮くとかそういう話か？」
「そうです」
カイドーは偽善が嫌いだ。
誰かのためにだの皆のためだのというお題目には反吐が出る。そんなものは金持ちが、貧乏人に情けをかけて、いい気になってるだけの勘違いだ。
カイドーは暴力が好きだ。
暴力は、そんな勘違いを吹き飛ばす。ケツに火がつけば、愛だの助け合いだのと言ってられなくなる。
だが、目の前の少年には、そういう偽善は感じられなかった。
自分が苦しい時に、他人のために自分の命を捨てようとしていて、そのことに揺らぎがない。
少年の気持ちは偽善じゃない。

けれど、なぜか、そのほうがムカついた。
「馬鹿野郎が！」
少年の顔をかすめ、拳で枕を殴る。
「ガキが、誰かのために死ぬとか、くだんねぇこと言ってんじゃねぇよ！　十年早ぇえ！　テメェみてぇなガキは自分一人だけ生き残ること考えてりゃいいんだよ！」
なんで腹が立つのか自分でもわからない。
「しかたないんです」
ほとんど優しいとさえいえる声に、カイドーは本気でキレた。
病人だろうが何だろうが顔の真ん中にいいやつを一発たたき込む。本気で死にたいなら構やしねぇだろう。
そう思った時、少年が言葉を続けた。
「妹なんです」
カイドーの手から力が抜けた。
「同じ病気で……発作が起きると、とても苦しいんです」
苦しいのは妹。
自分の苦しみのことなど考えたこともない、そんな表情だった。

「妹ってのはどこにいるんだ？」
「隣です。会うと、お互い体調悪くするからって、今はあまり会えないんですけど」
「テメェの妹ってのは、兄貴が死んで喜ぶのか？」
「できることを考えたんです。いろいろ考えたんです。でも他に方法がなくて……」
少年が目を伏せた。
残酷なことを言ったと気づく。
「ぼくは弱いんです。もっともっと強くなりたいんです。でも……」
「ったく」
カイドーは吐き捨てるように言った。
「ガキはよけいなこと考えねぇで、寝てろっての」
後ろ手にドアを閉める。

「マリ姉、この病院、薬足りてねぇのか？」
「あの子のこと？　それとも妹さんのほう？　ええ、両方足りてないわ」
優しく穏やかな幼なじみは、穏やかに残酷なことを告げた。
「二人だけじゃないわ。足りてるもののほうが少ないくらい。あのね、世の中には、

決まったお薬さえあれば普通に暮らせるけれど、無いと命にかかわる人がたくさんいるの」

マリ姉は、そう言って窓の外を見下ろす。

「この病院に、庭があってよかったわ」

カイドーも窓の外を見る。綺麗な芝生は、あちこち掘り返されていた。マリ姉も、その細腕で穴を掘ったのだろうか。

「どっかにねぇのか？　その、製薬会社とか」

カイドーは口に出していた。

何をしてるんだ、俺は、と、思う。俺らしくない。

予定が狂いっぱなしだった。

「まぁいい。今日は休みだ、休み」

3

東京全体が封鎖された時、たいがいの人間は、すぐ終わると考えた。

いや、長く続くと考えるのが恐ろしかった。

故に、策もなく、ただ、漫然と日々を過ごし、そして追いつめられた。

中には目端の利く者もいた。

非常時に何が役立つかを考えた。

まずは食料。

そして生活必需品と医薬品。

今となっては悪魔とマッカもだ。

それらを独占して権力に変える。

そう考えて実行に移すものも存在した。

とある渋谷のチームがそうだ。ダイモンズを率いるものとして、カイドーも、そのチームの存在は知っている。

裏で麻薬を売りさばく連中。ドラッグの威力を知ってた彼らは、製薬会社に目をつけた。会社を制圧し、倉庫を押さえた。

医薬品は、薬としてもドラッグとしても、何にでも姿を変える理想的な藁(わら)しべだ。それこそ悪魔すら手に入れるほどの。

悪魔を使役すれば、金、食糧、薬、全てが揃う。膨れ上がる権力はマッカの入手

すら助け、悪魔を強くする。そして強くなった悪魔は更なる富を稼ぎ出すという仕組みとなっていく。

ビルの前に見張りはいなかった。
中のほうで、げらげらと騒ぐ声がする。
廊下は、かつては清潔すぎるほど清潔で、消毒液の臭いに満ちていたのだろう。
だが、カイドーが入ったそこは、混ざった薬品とすえた汗の臭いがした。あちこちに、注射器や錠剤のカバーが散乱している。
カイドーは注射器を足で踏みつぶす。がりがりと音を立てるガラスを踵でつぶして歩を進める。
きちんと使えば、助けた少年やその妹、ほか多くの人を助けられた薬。が、やつらにとっては、ハイになれるかどうか、金かマッカになるかどうかの意味しかない。

扉の向こうから声がした。
男と女の声。カイドーは無言で蹴破った。
むっとする体臭が鼻をついた。大勢の男がいた。女も、悪魔もいた。みんな、どろりとした目をしている。

「なんだぁ、てめえは」
ろれつの回っていない声。
触れるのも気持ち悪く、とりあえず蹴り飛ばす。
「死にたいやつからかかってきな」
何人かがＣＯＭＰに手を伸ばした。
「パズス」
カイドーも仲魔を呼ぶ。
「灼き尽くせ」
短く伝える。部屋の濁った空気が耐えがたかった。
砂漠の熱風が、部屋に渦巻いた。

カイドーは偽善が嫌いだ。
偽善をはぎとる暴力が好きだ。
悪魔を焼き、人の骨を折りながら、カイドーは考える。
こいつらは全く偽善ではない、と。
はぎとって露わになった人間の欲望そのものだ。

じゃぁ、俺は、なぜ、こんなに腹を立てているのか。

少年のことを思う。幼い瞳で死ぬことを選んだ少年を。なぜ、俺はあんなに腹が立ったのか。

強くなりたいと願う少年。その顔に重なるものがある。

あれは……俺だ。

兄貴が死んだ時の自分だ。

大好きだった兄貴を失って、途方にくれた俺。

警察は、兄貴を取り戻してはくれなかった。犯人さえ見つけられなかった。世間は自業自得だといった。

　悪いやつらとつきあいがあったのだろうと。だからひどい目にあったのだろうと。事件への不安を死者に押しつけ、安全なところから哀れみ、悲しみ、本心では侮蔑していた。

　あの日から、カイドーは偽善を憎むようになった。強くなりたいと願った。兄貴のために。マリ姉のために。

　……くだらねぇ。

パンチを交わしながらカイドーは、そう思う。

俺は俺。

昔のことを思い出す柄じゃねぇ。

それを言うなら、子供のために、体を張るのも柄じゃない。

そうだ、これはあの兄妹のためじゃない。

マリ姉のためだ。

薬が足りなくてマリ姉は、病院の庭に穴を掘った。

あの優しいマリ姉が心を凍らせて、自分の無力を噛みしめながら、大勢の人を見送り、埋めた。

　こいつらのせいだ。

そう思うと、腹が立ってきた。

　今まで感じていたじわじわした嫌悪感ではない。真っ赤に燃える、どこか陽気とさえいえる怒り。カイドーをカイドーたらしめる怒り。

「さぁ来いよ。死にてぇやつはどいつだ？」

　カイドーは鮫（さめ）のように笑って指を鳴らした。

4

「よぉマリ姉」
　カイドーの服装を見て、マリ姉は、一瞬表情を固くした。ぼろぼろの服。返り血。傷がないのは回復魔法を使ったのだろう。
「大丈夫？　無理しちゃだめよ？」
「例の製薬会社、今空いてるぜ。また誰かに居座られる前に、とっとと行ってきな」
「……ほんとう？」
　マリ姉の言葉には、隠しきれない興奮があった。
「嘘ついてたまるかっての」
　カイドーは大あくびをした。
「おかげで徹夜しちまった。じゃな」
「ま、待って。今、みんなに伝えてくるから」
　眠い目をこするふりをして、カイドーは、マリ姉のあわてる顔を、じっくりと見る。

隠しきれない喜びの様子を頭に刻みつける。
「面倒はごめんだぜ。帰る」
　そう言って病院から出ようとすると、小さな足音が響いた。
　裸足の足音。
　子供の精一杯の駆け足。
「おいおい、病人は寝てろっての」
「カイドーさん、薬を取ってきて、くれたん、ですか？」
「息切らすなっての。ったく」
　少年のほうを向き直る。
「言っただろ。俺はムカついたやつを殴っただけだ」
　少年は立ち止まって息を整える。
「ありがとう、ございます。ぼくもきっと、カイドーさんみたいに強くなって……」
　カイドーは、一瞬、うつむく。
　ならなくていい。
　いや、俺みたいになるな。
「くっだらねぇ。テメェは十分強ぇっての」

少年の頭をくしゃくしゃにかきまぜ、カイドーは出口に向かう。そこにマリが追いすがった。

「ね、忙しいのは知ってるけど……もうちょっといられないかな？　病院のみんなお礼を言いたがってるし、あと、妹さんにも会ってほしいな……」

マリ姉のすがるような瞳をふりきって、カイドーは言った。

「わりー。休みは、もう終わりだ」







休暇の終わり

1

終わる気配を見せず続く封鎖に、人々は疲れきっていた。

限界に達したストレスは暴動を生み、大規模な破壊と打ち壊しがあちこちで起きた。だがそれさえも何を解決するわけではない。一時の暴力の果てに人々は虚脱する。

虚脱して虚無に耐えられず、また暴力へ向かう。わずかに残っていた秩序は、刻一刻と削り取られていった。

——七日目に世界が終わる。

どこからともなく流れた終末の噂が、混沌に拍車をかけた。

目に見えない一線がついに崩れたのは、七日目昼過ぎのことだった。失火か放火か、抗争の結果か、あるいは何者かの陰謀か。原因は定かではない。東京のあちこちで、ほぼ同時に炎が生じた。

住宅街の一角に現れた炎が通りをなめて大きく拡大してゆく。赤黒く光る空の元、広がる炎が人々の顔を照らしだす。
　炎に追われて必死に走るもの。狭い道の中でぶつかりあうもの。別れた家族や恋人を捜して人の流れに逆らおうとするもの。もはや動く気力もなく、燃える道ばたに立ち尽くすもの。
　空は濁り、黒煙が渦巻き、下界は闇に閉ざされていた。
　赤黒い闇の中で動くものがあった。
　闇よりもなお黒い漆黒の影。小山のように大きい影は、怪獣のような足音を立てて進む。黒い影が深く息を吸い込むと、ごうごうと風がうなった。
　あたりの熱気も煙も吸い込み、人々が耳を押さえる。黒い影が膨れ上がり、空気そのものが薄れて消えるかと思われた時、ふいに風が転じた。
　清涼な冬の風が煙を吹き払う。闇の吐息は吹雪だった。真っ白な雪が、炎を浴びてきらきらと光る。建物の一つが凍り付き、炎の進行が止まる。
「これでいいホ？」
「いいわよジャア君、その調子。さっ。みんな、今のうちに早くくっ！」

元気な女の子の声がした。
　真っ黒い小山のような悪魔、ジャアクフロスト。その傍らに、奇抜な服装の少女が立っていた。紫の服に長いリボンをなびかせ、掲げた腕をくるくると回す。
「不意の火事にも準備万端！　マジカル・ドリーにおまかせよ！」
　歓声がわいた。
「火の回りが早い。次の場所へ移動しよう」
　キメキメのポーズを取る少女に、眼鏡の少年が静かに声をかける。
「そうね。急がないと」
　コスプレ少女……ミドリはＣＯＭＰに目を落とす。
　二人が火事に間に合ったのは、メールで届いた地図のおかげだった。
　暴動の際に一番危険なこと……火災を予測し、起きやすいラインと延焼をくい止める最適のポイントが記入されていた。
「すごい計算だな。今のところ地図通りだ」
　ケイスケは次の移動先を確認する。
「えーと、ほら、アツロウ君の知り合いの、ひきこもりの」
「ひきこもりってなんだホ？」

ジャアクフロストが首を傾げる。
「いやまぁ……」
ケイスケは眼鏡をおさえた。
「この計算がひきこもり……凄腕ハッカーの成果だとするなら、彼はいい仕事をしたんじゃないかな」
今頃、彼はどうしているだろう？
塔の上から、この火事を見つめているのだろうか。
ケイスケは一瞬だけ秋葉原のほうを振り返ると、次の目的地に向けて走り始めた。

2

少年と老婆は息をひそめていた。食料の供給状況は悪化し、それと共に治安も悲惨なこととなった。子供一人、あるいは老婆一人で外にでることなど全く問題外だ。
暴動に巻き込まれないために灯りもともせず、うだるような暑さの中で、ただじっと過ごしている。
「ばあちゃん、だいじょうぶか？」

育ち盛りならお腹も減るだろうに、少年は気丈に、そう聞いてくる。
「私なら大丈夫ですよ」
そう言いながら、老婦人は、どう少年を逃がそうかと考える。
息を殺し、じっと部屋にこもっていたため、二人は気づくのが遅れた。
空気にまじる煙の臭いを感じた時は、すでに火はまわりはじめていた。
「ばあちゃん！」
少年が初めて怯えた様子を見せた。
「さ、行きなさい。助けを呼んできておくれ」
「いやだいやだいやだ、ばあちゃんと一緒じゃなきゃいやだ」
ぱん、と、頬が鳴る。少年は呆然と、頬を押さえた。
「わがままいうんじゃありません」
老婦人はあえて厳しく言った。
「男の子でしょ。さ、いきなさい」
「だって、だって……」
言葉に咳がまじった。煙は強い。
少年は唇をかみしめてうなずく。

「おれ、絶対戻ってくるからな！」
老婦人は、微笑んでうなずいた。

少年は走る。火の回り始めた玄関を飛びだす。
「だれか！」
大声を出し、煙を吸い込んで咳込んだ。鼻が喉が焼けるようだ。
助け。助けを呼ばないと。でも、どっちだ。どこへゆけばいい？
あたり一面、煙だらけで、どちらから火が来てるのかさえ、わからない。
「だれかっっ！」
叫びは、煙に吸い取られるようだった。
意識が遠ざかった瞬間。
「ザン」
声が風を呼び煙を吹き飛ばす。熱気と煙が去り、少年は必死で息を吸い込む。
「だいじょうぶかい？」
どこかのんびりとした声に、少年は理不尽な怒りを覚えた。にらみつけようとしたが、煙のしみた目から涙が止まらない。

「ばあちゃんが、中に！」
やっとそれだけ言った。
「そりゃいかん」
男は燃える家に迷いなく走り込む。

長髪の男は走る。ブフとザンで冷気をまとい、炎を蹴散らして進む。
――結局、彼は、孤高の暮らしを捨て、塔から降りたのだった。
アツロウから、何度かメールが届いた。
封鎖の根源に迫るアツロウたちの戦いをみて、男は、ただ見ていることに耐えられなくなった。思い立って火災対策を計算、立案し、アツロウにメールした。
それでも足りない気がした。何かできることがあるはずだ。それを探して、塔を降りた。
「おばあちゃん、おばあちゃんは、いますか？」
ドアの奥でかすかな咳が聞こえた気がした。
ノブを開けようとして。
「あちっ」

手のひらを押さえる。ブフの呪文で凍らせて蹴破った。

いた！

ベッドの上に寝ている老婦人は、咳込んでいた。

ということは、まだ息があるということだ。

ザンで窓を割り、部屋の中の熱気と煙を外へ逃がす。

「もう大丈夫ですよ」

声をかけて、老婦人を抱えあげる。

頭の中で冷たい声が言った。

——おまえは今助けた。数百万の中の一人を。システム全体からすれば誤差にすぎない数字を。

「うるさいな」

小さくつぶやく。今は、そんな声を聞いてる暇はない。

「おばあちゃん、立てますか？」

老婦人は立ち上がろうとしたが、顔が白い。

「すいません、目をつぶっていてください」

ＣＯＭＰ起動。闘鬼コボルトを召喚。茶色い肌の悪魔と二人で老婦人に肩を貸し、

ゆっくりと家を出る。

「ばあちゃん！」

外に連れ出すと、少年が老婆の腕の中に飛び込んできた。老婦人は、ゆっくり微笑んだ。

「ありがとう……ねえ……」

泣き伏せる少年と老婦人を見ると、心に暖かいものが広がった。一つの命は断じて誤差なんかじゃない。

少年が目に涙をためて振り返る。

「おばあちゃんが……」

「大丈夫。眠っているだけだ。近くに病院がある。歩けるかい？」

「うん！」

若者と少年、老婆は、燃える町を歩き続ける。

3

病室の中で小さな兄妹はたがいの手を取っていた。

そして己の弱さを噛みしめていた。

外から聞こえる叫びや悲鳴はどんどん大きくなり、人のものでないうなり声や銃声までが混じり始めている。

今日になって、なぜ病院が襲われているのか、兄にはわからない。

病院の食料や薬を狙っているのか。ここに逃げ込めば安全だと信じているのか。あるいは理由などないのかもしれない。狂った世界の中で、唯一秩序を保っているかに見える、この場所が疎ましいのかもしれない。

いずれにせよ、大勢の暴徒が病院に押し寄せているのはカーテンを閉めていてもわかった。

パリン、と、ガラスが割れて、カーテンが跳ねた。握っていた妹の手に力が入る。

「……おにいちゃん？」

「平気だ。流れ弾だよ」

そう言って妹を慰める。

「二人とも、平気？」

扉が開いて、マリが駆け込んでくる。

「はい。大丈夫です」

マリはカーテンを見て流れ弾に気づく。

「床にいたほうがいいわね。手伝って」

「はい」

二人で床に寝具を移し、妹を横たえる。

「わ、おうちみたい」

妹の病院暮らしは長い。

家にいた頃は布団だったのだろう、笑みを浮かべ兄にそう言った。

「二人とも、ここにいてね。頭をあげちゃだめよ。知らない人が入ってきそうだったら声をだしちゃだめ」

兄妹は、こくりとうなずく。

「すぐ終わるから、じっとしててね」

マリの笑顔に、兄は泣きそうになった。

この人は、今から、あそこへ……銃弾や悪魔が飛び交う中へ戦いにゆくのだ。そして自分はなにもできないのだ。

「あら、どうしたの？　こわい？」

「怖くないです。でも……」

言葉がうまくでなかった。
「怖くなんかないものね。お兄さんだものね」
マリの言葉に、兄は無理やりうなずいた。
できることがある。妹のそばにいること。
「おにいちゃん、マリ先生が心配なの」
「なあんだ、そうなの」
マリは微笑む。
「大丈夫。こう見えても、私、強いんだから」
力こぶ。
「でも……」
悔しい。情けない。
「子供は大きくなるのが仕事よ。君が大きくなるでしょ。そうしたら私はおばあちゃんになる。その時はね、君が私の代わりに、小さい子を守ってあげて」
マリが兄妹の手を握る。
「いい、約束よ?」
少年はマリを見る。真剣そのものの表情に、うなずいた。

「じゃ、行ってくるからいい子で待っててね」
「お姉ちゃん、いってらっしゃい！」
「いってらっしゃい」
兄は、マリの背中に手を振ると、妹の横に伏せた。

4

巨大な光の柱が落ちたのは、午後遅くのことだった。
封鎖された東京にいたすべてのものが、天上の光を発するその柱を仰いだ。
閉めたカーテンを貫いて、部屋に光が満ちた。
「おにいちゃん！」
兄は妹をかばうように覆い被さる。息を殺して、じっと数を数える。
……十。……二十。……三十。
光は消えなかったが、それ以上の変化もなかった。
「だいじょうぶ……みたいだ」

「うん……」
兄は抱擁を解き、ほっとため息をつく。
「マリ先生、大丈夫かな？」
「まってろ。今見る」
「お兄ちゃん、顔あげると、危ないよ」
「大丈夫。ちょっとだけだ」
兄は窓際に近寄り、少しだけ顔をあげてカーテンをめくった。

光の柱が落ちた時、マリは悪魔たちに囲まれていた。
皆、光を仰ぎ、戦闘が一瞬止まる。マリは一瞬早く立ち直り、その隙に。
「マハラギオン」
極大の火炎呪文をぶつける。
病院の戦闘は熾烈を極めた。ただの人間は、早々に倒れ、残るは悪魔使いとその仲魔、そして野良悪魔に限られた。
なるべくなら、患者たち、同僚たちに悪魔を使うところを見られたくなかったため、マリは戦場のど真ん中へ歩を進めた。

そこでは敵も味方も何もなく悪魔も悪魔使いたちも、ただただ互いを襲っていた。
「あの光……あの子たちがうまくやったのかしら」
考える間に、二つ首の巨大な魔犬が飛びかかる。首筋のすぐそばで、牙ががちりと音を立てて閉まる。その鼻面に正拳を決めて、戦いに集中する。
今、自分にできることは、背後の病院を守ることだけだ。
そう知りながらも、マリは最後に一度だけ空を見上げ、祈りを捧げた。

「うわっ。なんだ！」
少年は光を見て、叫んだ。
「落ち着いて。アツロウたちがうまくやってるんだろう」
「アツロウ？」
「あぁ。僕の知り合いでね。この封鎖を止めるためにがんばってる。アツロウにユズ、それと、えーと……」
「ユズさんって、聞いたことありますよ」
老婦人がコボルドの背で言った。
「ユズって、えーと、サンドイッチのおねえちゃん？」

「サンド……イッチ？　僕は直接会ったことはないんで、なんとも答えかねるが……きっと、そうじゃないか？」

「あの子がねぇ」

老婦人は何度もうなずいた。

「あの子は言ってましたよ。封鎖を解くために頑張ってる人がいるって」

「ユズかぁ」

そう言って少年は光を仰ぐ。どこか頼りないが一生懸命だった面影を思い出す。

「それにアツロウだ」

長髪の男も、光の中にアツロウを思い描いた。

「あの子ならきっとやってくれますよ」

老婦人はそう言って手を合わせた。

空から落ちた光の柱を、様々な人々が様々な思いをこめて見上げた。あるものは戦場で、あるものは病床で、あるものは道ばたで。祈りを込め願いを込め、あるいは畏れや憎しみ、恨みをこめて。無数の祈りと無数の呪いが光の柱に注がれる。

東京の命運が決するまでには、あとわずかの時があった。


みのり文庫
ていあていあ。いち
藤浪智之
みのり文庫
ていあていあ。にい
藤浪智之
みのり文庫
ていあていあ。さん
藤浪智之
AQUAPLUS
AQUAPLUS
AQUAPLUS
ティアーズ・トゥ・ティアラ
ていあていあ。
花冠の大地
チビキャラ
短編集
発売中！
全3巻ダヨ！
定価￥640＋税

みのり文庫をお買い上げいただきありがとうございました。
この本を読んでのご意見ご感想をお待ちしております。

〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町1-8-3　長谷川ビル１Ｆ
みのり文庫編集部「女神異聞録デビルサバイバー」係

女神異聞録デビルサバイバー
アンソロジーノベル　Vol.2

2009年9月15日　初版発行

著　者——海法紀光・七門・村田治
発行人——河出岩夫
編　集——小寺盛巳
発行所——有限会社ハーヴェスト出版
〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町1-8-3
長谷川ビル１Ｆ
TEL. 03-3865-7778
FAX. 03-3865-7779
発　売——株式会社星雲社
〒112-0012　東京都文京区大塚3-21-10
TEL. 03-3947-1021
FAX. 03-3947-1617
印　刷——中央精版印刷株式会社

ISBN978-4-434-13401-2

郵便はがき

切手を
お貼り
下さい

101-0024

東京都千代田区神田和泉町1-8-3
長谷川ビル1F

有限会社　ハーヴェスト出版
みのり文庫編集部 行

住所 〒 TEL　　　(　　　)		
フリガナ 氏名	男・女	歳
職業・学年	お買い上げ書店名 市 店	

このたびは「みのり文庫」をご購読いただき有難うございます。
抽選で毎月5名の方に記念品をさしあげます。
尚、発表は発送をもってかえさせていただきます。

お買い上げの本のタイトル

『女神異聞録デビルサバイバー アンソロジーノベル Vol.2』

・内　容　　面白い　　まぁまぁ　　イマイチ
・イラスト　GOOD　　まぁまぁ　　イマイチ

・本作の中で、どのキャラが気に入りましたか？
（　　　　　　　　　　　　　　　　）

・このジャンルの本はどのくらい読みますか？
毎月（　　）冊くらい　　ほとんど読まない

・本書のゲームソフトを
持っている　　知っているが持っていない　　知らない

・あなたのツボは？（複数可）
・純愛もの　・学園もの　・時代もの　・ＳＦ　・ロリータ　・妹もの　・お姉様もの
・メイド　・アンドロイド　・メガネっ娘　・ネコミミ　・看護婦　・巫女
・その他（　　　　　　　　　　　　）

・お話に出てくる女性は何歳ぐらいがいいですか？
（　　　才～　　　才）

・「もっとこうして！」「ここが良かった！」などなど。

ご協力ありがとうございます。